

《第Ⅱ部》 『実習室だより』 復刻版

実習室だより 第1号

同志社大学先史学会発行 Apr.5

「第一回総会から」

過日（3月21日）実習室で行なわれた先史学会総会で発言された内容を簡単に括めてみた。

1. 概要

総会で話題になった主な点は、これからの研究会の活動を、どのようにしたら良いかということであって、まず酒詰先生から、ここ数年来の研究会活動の欠陥の指摘を中心としての報告があり、「初めは、山陰を計画的にやりたかったが、経済的にその条件がなかった。アトランダムに調査がやられても成果は充分にあったと思われるし、わるい事ではないので、現状からしてやむを得ない。」と発言された。活動を系統的に行い度いという意見は、誰れしもが認めており、条件に悪いところがあっても、とにかく組織的な研究グループとして会を育てあげようという意見が支配的であった。

組織的な活動については、共同のテーマの一つ定めても良いのではないかという意見（森さん）も出され、又研究室に関係する人が、一週に一度でもよいから、研究室の時間を特別に設け、その時間は私的な仕事でなく、共同して一つの仕事をしようという意見（石部さん）も出されている。

2. 組織

組織については、会員の他に、積極的に協力して下さる人達が同志社外におられる事だし、この人達のためにも又、新しく参加して下さる人達のためにも、「会友」を設けて置く事が望ましいという意見が出され、これを全会は認めた。

活動をスムーズにするために会の運営について、責任を持つ委員を置く事が決められ、委員達は、より多く意見を交換するための場を持つ事が要請されている。

委員 森浩一、石部正志、その他二名。

3. 出版物

機関誌の出版については、これまで行なわれていなかったのであるが、研究会のこれまでの成果とか、卒論のうち良いもの、etc.を何らかの形で出版したい、というのが現在の全体の意見となっている。

4. 会費（月額）

学生は、 50円

大学院以上及び会友は、 100円

5. 本年のプラン

A 網野（縄文） B 能勢（古墳） C 北海道

本年度の総会は、参加した人達も少く、意見も多くは交換されず、また限られた時間内で開かれたので、出された問題を十分に話し合う事はできなかったが、それでも考慮すべき問題は多くあったようである。

（文責：スズキ）

実習室だより 第2号

同志社大学先史学会 MAY.5.1957

今年度第一回例会から

今年度の第一回例会は、去る4月23日（火）の午後2時30分より寧静館42番教室に於て、新入会員の歓迎会をかねて行われた。会は酒詰教授の挨拶に続いて下記の4氏による講演が行われ盛会であった。

1. 先史学と自然科学・・・岡田茂弘氏
2. 北海道の考古学・・・千代 肇氏
3. 先史学会のあゆみ・・・石部正志氏
4. 畿内遺跡案内・・・森 浩一氏

【講演要旨】 先史学と自然科学 岡田茂弘氏

先史学とは何かに就いては、今更説明する迄もないと思うが、之を一言をもって表わせば、「残された先史時代の事実・事物等の資料の比較研究によって先史時代の人間の文化及びその環境を研究する学」と云う事が出来よう。それ故明らかにman scienceの一分野である。それに対して自然科学は生命現象に関係あるもの、無いものを問わず直接に人間の関係して来ない自然に存在するものを対象とし、自然現象を研究する学であるから、先史学などの人文科学とは、例え部分的に同一な事柄を取扱う事があっても各々目的を異にするものであり、学問の分類の上からみると全く別の科学であると云ってさしつかえない。貝塚の貝の様に自然科学的な研究材料を先史学が取扱うために、屢々先史学は自然科学の一分野か、若くは自然科学と人文科学の中間的性質を有するかのように見られる事があるが、これは認識不足な観方であり、先史学は研究の手段として自然科学的技術を借りているに過ぎないことを認識する必要がある。

しかしながら、実際問題として先史学の研究材料の大部分が残された事物・事象であるため、材料の処理にあたって非常に多くの自然科学的技術が取り入れられているし、より高度な自然科学の技術及び成果を利用すればするほど良い結果がえられることも事実である。例えば動物相・植物相・地形発達史の研究による当時の食生活及びそれを支えた環境を知る事が出来るし、石材の岩石学的研究による交易圏の解明、更に絶対年代を知る熱残留磁気法・放射性炭素法・弗素テストなどいずれも自然科学の技術の応用によってはじめて可能となるものである。結局、先史学の目的を確認しながら、出来るかぎり自然科学の技術を応用して行くことが望ましい。

北海道の考古学 千代 肇氏

北海道の考古学の話と言っても新入生の方には話が専門的になりますと解りにくいかと思いますの

で、今日は北海道での考古学がどの様にして発展して来たかと言うことを語ってみたいと思います。

北海道の石器時代の遺物が初めて人々に注目されたのは寛政2年（1790年）に菅江真澄が北海道を旅行いたしました。元和9年（1623年）菅江真澄が旅行する85年（ママ）ほど前、津軽藩が蝦夷に対する築城を西津軽郡館岡村亀ヶ岡に計画しました。工事をしたところ土器が出土するので当時の耽奇家（集古家）の目にふれるようになったのですが、菅江真澄は根室から出土する土器と亀ヶ岡から出土する土器は同じもので、これはアイヌが使用したものだと言っています。寛政年間には村上島之丞は『蝦夷島奇観』に渡島国（北海道の南部）の当別から発見された土偶の図とか十勝の深山にいるアイヌは入墨をするのに黒耀石を使うなど書いています。アイヌ人が石器を使うと言うことは北海道を旅行した人達が木内石亭にアイヌが石鏃を使っていると知らせたものもあります。その後弘化2年（1847年）の松浦武四郎の『西蝦夷日誌』や安政3年（1856年）の大内餘庵の『東蝦夷夜話』などに土器石斧などの事を報告している。

明治になりますと9年に榎本武揚が小樽の手宮の古代文字を実見しそのことを報告しました。11年には手宮の貝塚や付近から出土した遺物を開拓使博物課に納め、その資料を伊国地学協会に出品しています。9年の8月には当時東京大学の教授であったジョンミルンが小樽の手宮を中心に初めて学術的な研究を行い、12年の7月にはアジア教会雑誌に“General Remarks upon the prehistoric Remains of Japan”を発表しました。当時はこの彫刻が北海道の考古学上の重要な問題でありましたので、このため日本考古学の基礎をつくりあげた坪井正五郎、エドワード・シルベスター・モールス、渡瀬庄三郎、森鷗外、鳥居龍蔵の諸氏が渡道したり報告を書いたりして北海道は有名になり、この影響によって今日の考古学にいたったのであります。

同志社先史学会のあゆみ 石部正志氏

同志社先史学会は創立されてから満4年を経過したのであるが、今迄何をして来たかを幻燈で新入生の諸君に示すことにする。最初のもは昭和28年の鳥根県大社町字菱根遺跡（縄文前期）のものであり、次は昭和30年の古代学研究会と提携して行った、宇治市八軒屋遺跡（土師）のもの、森君が発掘した昨年夏の南河内の陶器村のスクモ塚と、かまど塚のもの、熊本県川村の吉の尾古墳群のもの、最後は昨年末から本年にかけて行われた上賀茂本山の窯跡（弥生式末期から釉薬陶器に亘るもの）である。今年は夏大挙して北海道行を計画している。これらの活動を通じてわれわれは実質的に日本の学界に寄与することを期しているのである。経費或は人員の数等で多少劣るところはあっても、最上の学的水準に於て仕事を進めることを期している。指導者、先輩等の後について、新人の間からも、続々優秀な熱心な研究者が生まれて来ることを切望して止まざる次第である。

掲 示 板

◇考古学専攻の昨年度卒論は次の通りであった。

糸谷裕補「大阪府垂水遺跡について」

窪田 宏「石包丁」

舛石瑞次「兵庫県保久良神社に就いて」

大森栄一「考古学上より観たる中河内」

沢田 一「環濠集落について」

鈴木重治「住居址（回顧と展望）」

多武利男「大阪府千里山丘陵の諸遺跡」

武田桂治「後期・晩期縄文式文化の一考察（特に土器の形態・文様の推移と縄文式・弥生式文化の墓制の比較）」

坂上律郎「北摂の古墳」

◇森浩一兄は「須恵器考」により修士号を授与され、大学院博士課程へ進まれた。

◇本年度の考古学専攻者は古田昭夫・東宏美・池谷和三・北中叡・三好敏夫・沢田禎夫・嶋瀬晃栄・横野和夫の8君である。

◇糸谷兄は大阪印刷インクK.Kへ。舛石兄は日本電々公社へ、沢田兄は奈良市東向の商事会社へ、鈴木兄は宮崎博物館へ、岸密晴兄は北陽高校へ夫々就職された。

◇本年度の大学院博士課程考古学専攻の在籍者は、石部正志・森浩一の二兄、修士課程の方は堅田直・宇多川誠一・岡田茂弘（新入）の三君。

◇日本考古学協会春季総会で、本会の石部正志・安井良三の両兄は入会を認められた。

◇広部富美子氏は4月20日細川計明氏と華燭の典を挙げられた。

◇岡田茂弘兄は目下文化財保護委員会主催の四天王寺址の発掘に参加されている。

◇北海道調査旅行参加者希望者は至急申込まれたい。詳細は希望者（申込者）に通知する。

◇五月中に本年度分会費全額を納入した方に限り年額1000円にします。

昭和32年5月5日発行

発行者 同志社大学先史学会

代 表 酒詰仲男

発行所 京都市上京区今出川通烏丸東入
同志社大学先史学会

実習室だより 第3号

1957年6月10日

同志社大学先史学会

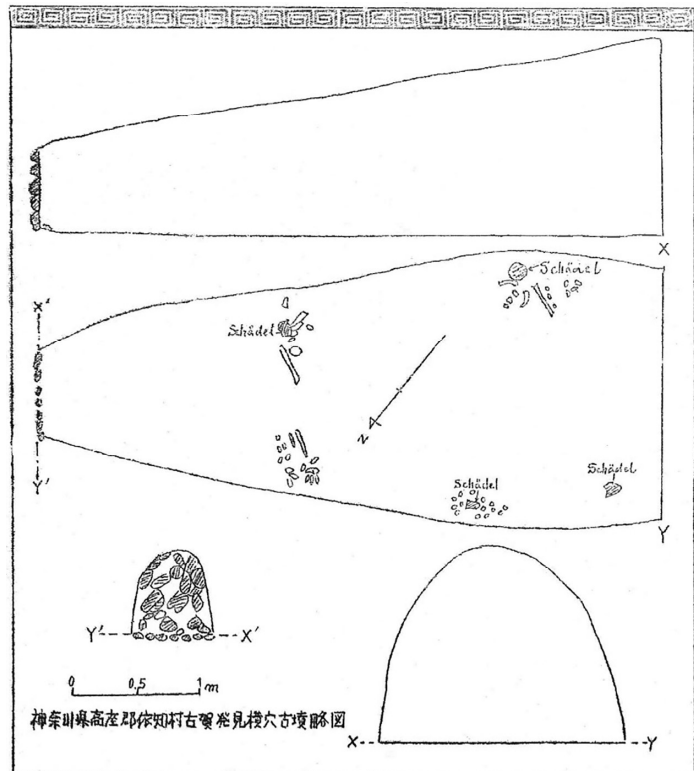
神奈川県相模川支流の一横穴古墳

酒詰仲男

国大考古学会会報『若木考古』43号、pp2～3（昭和31年11月）に、佐藤善一氏による横浜市元石川下谷横穴古墳の報告が載っているのを見て、予も昭和24年に、これによく似たものを、相模川地方で実査したのを思い出し、その時の旧記と小堀巖氏の実測図を取り出して見た。

これがあるのは厚木市の北約4軒のところで、高座郡依知村大字中依知字古賀にある。旧記の方には、余り詳記されていないので、おぼろげな記憶を辿って記すことにする。調査に赴いたのは同年の7月27日のことで、同行者は鈴木尚博士と小堀巖氏と予の三人だけであった。確かここに人骨を出す横穴古墳のあることを、小堀氏の伝聞で知り、三人で出かけたものと記憶する。この地点は相模川と言っても、その本流に直面せず、厚木市でこれと合流するその一支中津川に属するものであった。この両方の川に挟まれた低平な一つの台地が、本市の北方に続いており、且且たる八王子街道が、その上を北上している。この道を暫く進み、金田の部落をすぎ、一寺を左に見て中依知の地内に入ったのである。ここで街道を離れて左折し、畑を通り抜けて行くと中津川の断崖に出る。この横穴はそれに掘られたものであった。

夏草をわけて探してみたところ、入口はすぐ解った。入口を閉塞してあった石積は、既に大部分崩れ去っていた。人骨の大部分も、そこから物ずきにも附近の畑の耕作者によって取り出されて、別の場所に収容されていた。然し鈴木博士の精査によって、人骨は図の如くに、すくなくとも2個体あったことが確認された。後から見た先の骨の保存は稍良好であったが、穴の中に取り残されているものは極めて不良で、さわればくずれる程のものであった。人骨の位置は奥壁に近く南を枕に、頭蓋、肋骨、発椎骨、大腿骨及指骨などが発見され、これのあるのと反対側の壁の近くに、頭蓋骨の破片が2個



見つかった。

なおこれ等の外に中央よりもやゝ入口の方へ寄ったところに長軸と畧直角の方向に、もう一個体分の骨があり、これには頭蓋骨、肩胛骨、鎖骨、すこし離れて脛骨、腓骨、膝蓋骨、足指骨等がばらばらに発見された。

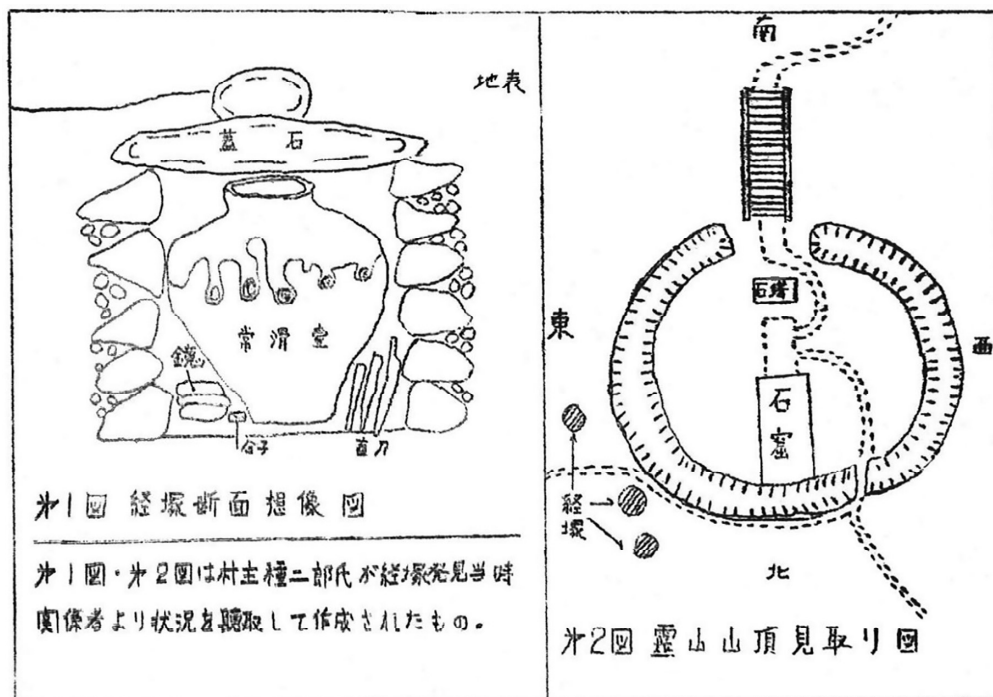
これ等の人骨の周辺には、やゝ大きめの玉石が敷き詰めてあった。これは全面的にあるものようであった。副葬品を全面的に搜索したが、一々石を起こして土まで篩った訳ではなく、遂に何物も発見し得なかった。午後2時頃迄に、鈴木博士は骨の発掘を終り、われわれは穴の実測を了えた。その時出来たものが附図の如きものである。図に記載されていないが、判然と記憶していることは、壁から天井にかけて縦鉋の刃痕が美しく揃って残っていたことである。平面及断面の形等、元石川の佐藤例と実によく似ている。ただやや細いだけである。この地域には、すぐ付近になお二三の同様のものがあると言うので、土地の人の案内で歩いて見たが、なんとも草の繁茂が甚だしく、余り判然としないので中止した。この人骨は収得し得るものは悉く採集袋に収め、前に取り上げた分も頂戴して、ルックに入れて人類学教室に持ち帰ったので、同教室のどこかに保存されている筈である。(昭32.6.5)

三重県霊山発見経塚の踏査

坪田嘉子

5月中旬に本学文化史専攻の4回生柿本比呂美姉が数点の遺物を実習室へ持参された。柿本比呂美姉のお話によれば、数年前伊賀拓殖の霊山頂上にテレビ中継所建設した際工事により出土したものと、遺物の中には和鏡、景德鎮と思われる合子、釉のかゝった常滑焼の破片、練鉢の破片や直刀片等があった。これ等遺物は出土地点や出土状態から考えて経塚からの出土物と思われた。それ故、早急の調査を必要としたので、本年6月2日(日)、石部正志、岡田茂弘、筆者の三人がその調査を行った。同日、まず草津線柘植駅を降りて約10分の道程にある柿本宅へ柿本の案内で伺い、姉祖父上より、霊山について種々お話をうかがった後、さらに村主種二郎氏宅を訪問した。同氏は柘植町の史談会員であり、霊山山頂で経塚が発見された当時、実地調査を行い、当時の状態を詳しく記録しておかれていた。村主氏のお話によると「三重県阿山郡春日村(旧西柘植村)」大字下柘植地内の霊山山頂テレビ中継所の鉄塔の建設は昭和27年に行われ、塔土台の建設に石を必要としたため、附近を試掘して石有する地点を発見したが、その石を取除くとその下には直径約3尺のピットがあり、その周囲に礫を積み、そのほぼ中央に常滑焼の壺を収め、壺の周囲に鏡と直刀とを収蔵した遺構が存在した(図1)この様な形式の遺構は他に隣接して2ヶ所あり合計3ヶ所に於て発見された由である。テレビ中継所の工事を視察に行かれた村主氏等が丁度現場に行き合わせ、「これは大変だ」と雨中で出土品を採集し、持ち帰られたとのことであった。現在その常滑焼の経壺3個は村主氏宅に保存されており、3個とも破損しているが復元は可能である。そのうち1は高さ530mm、口縁部直径244mm、胴部直径約372mmで緑色の釉が口縁部より肩部にかけてかかっており、底部にはモミの圧痕が認められた。2は高さ308mm、口縁部直径180mm、胴部直径264mmでこれも又黄緑色の釉が口縁部より肩部にかかっ

ている。3は破片が小さくその場では原形を推定出来なかった。その他に灰色を呈する練鉢の破片及び他の土器の破片が少量みられた。直ちに実測図と写真を撮らしていただき、午後、村主氏の案内で柿本氏を含めた5人は霊山へ登った。頂上への道は三本あり、私達は比較的なだらかな道を登って行き約2時間ののち頂上に達した。頂上では第二図の如く右手にテレビ中継所が見え、左には観音の祭つてある石窟がみえる。その石窟と石塔の周りには明らかに人工的に積み上げたとおもわれる土壘がぐるっとめぐっており、石塔の南の土壘の切れ目からは石段が下数拾段程あった。経塚の存在地点は丁度私達が登り着いたところに3ヶ所確認出来たが草が生い茂り、遺跡の詳細なるプランを確認する事は出来なかったが壺を囲っていた積石の石と思われる花崗岩の石片が採集された。更に私達は裏参道の近くで、薄い瓦器の破片と赤褐色の土器器片約20片程を採集した。この瓦器と同種のは柿本姉が実習室へ持参された中にも含まれていた。又、山頂から見下ろした風景は木津川が氾濫して出来た平野が広がってなかなかおもしろい地形で大きな公園の如くであった。私達は帰りは南側の表参道の石段を通過して下山したが石段を下り切ったところはまるで修学院の庭の様な感じだったので村主さんに「これは何ですか」と尋ねると、ここは現在は中復にある霊山寺の伽藍が信長の伊賀攻めで焼失する迄あった位置であって、石段上の観音の石室のある平坦面は多分奥の院であろうとのことであった。なお、今の霊山寺の住職も霊山経塚の遺物の若干を所持されているとのことなので下山の途中訪問した。そこでは和鏡3面、刀剣2本、合子の身が保存されていた。和鏡は破損が甚だしく直径82mmのものとして98mmの松喰鶴鏡と2分していた99mmの菊花双雀鏡とである。青白磁合子は直径55mmで景德鎮窯のものと思われた。直刀は291mmと331mmの長さのもの2本であったが腐蝕の度が著しかった。当経塚で出土した鏡は和鏡7面であり、そのうち私達が観たのは4面で他の2面は伊賀上野の葎葉秀



夫氏が所持され残り一面は伊賀上野市の図書館にあるとのことである。空が夕焼に映える頃、下山して柘植駅、午後8時発の汽車で帰路についた。

末筆ながら今度の踏査の際に種々御世話になった柿本御一家の方々、及び村主種二郎氏に対して深く感謝致します。

瀬田町東洋レーヨン内遺跡見学記

嶋瀬晃栄

過日、東洋レーヨン瀬田工場内に貝塚があるらしいことを知ったので、酒詰教授、岡田茂弘、坪田嘉子、筆者の四名は、5月18日瀬田の貝塚をたずねた。土曜日の午後、工場は清潔な空気に満ちていた。私達はまず、PRのパフレットによって、東洋レーヨンの偉容を認識したわけである。一寸とまどひ、そして嬉しく思ったことは、工場側が始終好意を持って私達を迎えてくれたことである。工場側に当工場の一部が増築されたとき出土したという遺物が保存されていた。提瓶・甑・常滑焼の壺・練鉢・摺鉢等であり、私達は実測し撮影することが出来た。さて愈々事務長さんのご案内で私達は城山の一隅に存する貝塚に向かった。よい製品はよい環境からと言うのが工場のモットーの由で、行く道すがら各種の樹と手入れのゆきとどいた花壇が私達の眼を楽しませてくれた。小高い丘、こんもり茂った緑、湖水の青さ、瀬田の流れなど誠に結構な景色である。この丘はその昔、佐々木氏の支城であったとの由でそれを語る記念碑が丘上に建てられていた。丘の端、土が切り取られて崖のようになった所に貝層が露出していた。地表から貝層上面まで約1m、貝層の厚さ約0.5mで東の方はかなり傾斜していた。しかしながら貝殻ばかりでその他の遺物は遂に一つも見出せなかった。ただ、ごく小さな摩滅した表面褐色、内部黒色を呈する土器小片が一個表面採集された。しかしこの貝層中に存在したのかどうかは甚だ疑問であり、これのみで貝塚と断定することは出来ないが、幼貝はなく、閉じた貝もほとんどない位で、自然に堆積したとも考えられない。恐らく貝塚であろうと思われる。非常に古いかもしくはごく新しい貝塚と考えられるが、今回の如き簡単な調査ではいずれとも定める事は出来ない。貝の種類は、セタシジミ、トンガリササノハ、イケチョウガイ、マツカサガイ、ドブガイ等、石山貝塚のそれとほとんど類似しているが、非常に違っている点は石山貝塚に比してシジミが非常に小さくかつ他の種類と比して小さいことである。結局、私達は貝塚であると結論づける事は出来なかった。だが本格的に調査すれば、何かを掴み得る筈である。私達は日を改めて調査することを期して丘を去った。その途次、土手で布目瓦一個を採集した。丘に寺院でも建立されていたのであろうか、とりこわして丘全体を調べることが許されたなら興味ある結果が得られるだろうとなど話合った。

瀬田を訪れた私達は、更に守山町の浮気に迄足をのばすことにした。五月初め頃、朝日新聞滋賀版に浮気で工事中、土器が出土したと記載されていた。守山駅の近くの貧弱な工事場が目指す地点だった。ここで布目瓦、土師器片、新しい須恵器坏、土器、青磁片と思われるもの等を採集した。

この日、私達は予期した成果をおさめることは出来なかったけれども、此次の機会にはと思いつつ帰路についたのである。

第二号正誤表

p.3-16行目「森君が発掘した」は、「森、石部、堀田、宇多川、武田君らが泉大津高校地歴部員らと発掘した」に訂正。

p.3-17行目「スクモ塚と」は、「ツキ塚と」に訂正

p.3-18行目「川村の吉ノ家古墳群」は「相模村の吉ノ家古墳群」に訂正。

p.3-20行目（弥生式末期から釉薬陶器に亘るもの）は（平安時代前期の施釉陶器製造地）に。

—第二回例会から—

亀岡市池尻坊主塚古墳発掘報告

安井良三

坊主塚古墳は京都府亀岡市馬路町字池尻の田圃の中にある上円下方墳である。大正年間、梅原博士が踏査されたのであるが、戦后、耕地整理が行われ、封土の破壊が甚だしく、ここに亀岡市史編纂委員会は梅原博士の指導によって、破壊寸前の坊主塚を昭和31年発掘調査することとした。報告書は近く刊行される予定であるが、今回の発掘によって判明したことを記すと以下の通りである。

- (1) 外形は一辺36m余り、高さ6mの上円下方墳であること、葺石は全面に認められた。
- (2) 内部構造に於いて、古墳の本来的な意味に於ける主体部構造（石室、粘土槨等）は全く認められず、従って遺物は直接埋葬されていたこと。
- (3) 出土遺物としては、仿製鏡1面、短甲1、肩頸鏡1、衝角付冑1、鉄族1把、鎗身1、直刀4、刀2などがある。

大阪市天王寺趾発掘に参加して

岡田茂弘

四天王寺は現在、大阪府天王寺区四天王寺、所謂四天王寺式の伽藍配置を有する寺として著名であるが、A.D593年に創建されて以来数多くの火災破壊にあい、近くは1945年の空襲によって全焼している。そのため、この機会に同寺の徹底的な発掘調査が、1955年以来文部省文化財保護委員会及び大阪府教育委員会の共催によって行われているが、本年も4月10日より5月16日にかけて調査が行われた。同寺の調査は未だ完了しているわけではなく、又、中間報告、正式報告等はいずれ文化財保護委員会の手により出されると思うので、私の参加を許された今年度調査の概略を述べるに留める。今回判明した事は以下の如くである。

- (1) 従来、完全に破壊されていると思われた中門からは、土壇周囲の周溝の存在によって、ほぼ創建時と考えられる土壇の規模が判明したこと。少なくとも奈良前期の中門（恐らく創建当時も同様）は正面3間、側面2間の門であり、天徳再建期に正面5間、側面1間になったと思われること。慶長以後の盛土中より、東西対称の位置に切断された人骨が出土したこと。

- (2) 塔周囲に於いては、飛鳥時代の地表面が発掘され、塔と中門を結ぶ奈良時代の瓦敷参道がみとめられたこと。
- (3) 金堂においては、最下層より掘込み土壇及びそれと同一工程と考えられる柱間3間、2間の台石が出土したこと。
- (4) 講堂では、奈良前期の土壇及び地覆石、更に北側に於いて、同時期の屋根の一部と共に落ちた瓦の堆積を発見。その下より肩榑木及び釣金具に装着されたままの風鐸が出土したこと。

掲 示 板

- ◇5月18日、かねて坪田姉より連絡のあった滋賀県瀬田町東洋レーヨン瀬田工場内城山に存する淡水産貝類よりなる貝塚らしきものを、酒詰仲男教授・岡田茂弘・嶋瀬晃栄・坪田嘉子氏らが調査した。又、同日、岡田・嶋瀬・坪田氏は同県守山町浮気の遺跡をも踏査した。詳略は本紙4頁にある。
- ◇5月19日・20日の両日、堅田直・岡田茂弘兄は京都府竹野郡網野町小浜の宮ノ下遺跡を予察した。同遺跡は、砂丘下に埋没した縄文早期から前期にかけての包含地遺跡であり、6月21日より発掘する予定。
- ◇5月26日、安井良三兄は京都学芸大学小江慶雄氏と共に、滋賀県高島郡新旭町御屋敷台上遺跡を踏査した。同遺跡より弥生式土器、磨製石斧、模造石剣、須恵器、土師器、奈良時代の瓦などが出土している。
- ◇5月28日、同志社大学同工館内考古学実習室に於て、本年度第2回先史学会例会が行われた。演題及び演者は以下の通り。
安井良三「亀岡市池尻坊主塚古墳発掘報告」
岡田茂弘「大阪四天王寺址発掘に参加して」
- ◇5月24日、同31日の両日、考古学実習の授業の一部として、御土居の現状調査を行った。因みに御土居は豊臣秀吉の命により、京都の境界線としてきづかれたもの。
池谷和三兄は、約一週間の予定で卒業論文資料収集のため上京していたが、5月28日帰学された。
- ◇6月2日、石部正志・岡田茂弘・坪田嘉子の三氏は、かねて本学柿本比呂美姉より連絡のあった三重県阿山郡春日村霊山山頂発見の経塚を踏査された。なお、詳細な調査経過は、本紙3頁にあり。
- ◇本年4月より宮崎博物館に赴任された鈴木重治兄は、所用状況の帰途、6月7日本学に立ち寄られた。なお兄は宮崎で種々の発掘調査を行なっている由。
- ◇5月10日より6月9日迄に、研究室への来訪者は次の如くである。
田中琢・佐原真・斎藤彦松・海老沢小枝・細川富美子・鈴木重治 諸氏。
- ◇本紙も漸く第3号を出すことになりました。今の所は相当に不満足な点も色々ありますが、Monthlyに出す線を崩さずに、少しずつでもよくして行きたいと思っておりますから、会員諸氏の協力をお願い致します。短報とか資料紹介・近況などお知らせ下さい。

編集者 岡田茂弘 昭和32年6月10日 発行 発行所 京都市上京区烏丸今出川東入ル 同志社大学 先史学会

実習室だより 第4号

1957年7月20日

同志社大学先史学会

発掘調査の組織について

鈴木重治

最近各地で遺跡の発掘調査が行なわれ、新聞紙上をにぎわしている。一見、ブームの波に乗っているようでもある。

戦前の歴史教育の片寄りを是正するための一助として、考古学の果たした役割の大きい事は誰も認める所であるが、その反面「研究の自由」に名を借りて遺跡が乱掘され、文化財が巷に迷っていた事は否定し難い。単なる遺物に対する興味からそれらを集めるだけであるなら、江戸時代のジレットマンの態度と変らないばかりか、研究・歴史教育にとって害になっても益にはならない。

この悪弊を法律によってとり除こうとして制定されたのが「文化財保護法」である。文化財保護法の発布によって、乱掘は確かに激減したのであるが、それでもあとを断ったとは言えない。乱掘以外にも遺跡の破壊が行われているが、意識的に乱掘すること程、悪弊を残すものはないだろう。意識を改める以外に是正することが出来ないから、至極やっかいである。

正当な発掘調査にあっても、それらのすべてが充分に行われているとは言えない。発掘調査の方法にも問題はあろうが、発掘調査の主体・言い換えれば発掘に参加する組織に大きな問題の一つがあると考えられる。

組織に焦点をおいて今後の指針を求めてみよう。「文化財保護法」が発布された翌年（昭和26年）度の発掘調査のうち、考古学協会に報告された124件に就いてみれば、次の表の通りとなる。

組織	研	研共	研・高	博	協	文	教	地	計
件数	42	18	36	10	4	1	10	3	124

〔註〕 研—大学等の研究室、研共—大学等の研究室の共同、研高—大学等の研究室と高等学校の共同、博—博物館、協—考古学協会、文—文化財保護委員会、教—各地の教育委員会、地—地方の研究者個人。

この資料から窺う事は、①大学の研究室が主体となっているものが圧倒的である事。②博物館・教育委員会の活動がそれにつづいている事。③考古学協会及び文化財保護委員会が中心となって組織作ることがまだ困難である事。④個人の研究は戦前から戦後にかけて減って来ている事。などであって、戦後の乱掘に手を焼いていた行政機関も含めて文化財の処理に手馴れ始め経済の安定も助けて、研究者の地道な活動が数字の上に反映されている。又、協会が中心となって総合的な研究が開始された事は特筆される。

5年後の31年に就いて「貝塚・考古News」51～62号（31年4月～32年3月）を見ると総計は90で

あり、その内訳は次の通りになる。

組織	研	研・共	研・高	博	協	文	教	地	無届	計
件数	28	27	13	9	2	3	5	1	2	90

〔註〕無届—無届発掘、その他—は前表と同じ

これによると、①大学等の研究室の共同調査が非常にのびている。②博物館の活動が全体の10%となり—まだ無届発掘によって遺跡が荒されている、などがうかがえる。

全体を通じて把握出来る事は、研究室の活動・博物館の動きが目立ち、26年より31年の5ヶ年で研究室間の共同研究が非常に増え、発掘に当って各方面の成果を総合しようとする意欲が現出している。それによって、個人の調査が減る方向をたどっているのは当然の事といえる。

以上の資料に基づいて、発掘調査に当っての組織について言えば、科学的な調査が行われるには多方面の協力が必要で、各分野からの考察が要請されるわけであるから、発掘は単に2つの瞳で行われてはならない。これは発掘調査の原則とも言えよう。

研究室・博物館等が発掘の主体となって、調査員を組織し、より高い発掘技術をより多く遺跡に集中することこそ、遺跡の現状を変える発掘調査に対して、埋っている文化財自身が望んでいる事であろう。

—発掘の許可制をめぐる—

荒される埋蔵文化財について

石部正志

鈴木君から、発掘調査の現状について大変参考になるデータが寄せられたが、文化財保護法を改正(改悪?)しようとする最近の動向とからんで、この点については若干補足を加えておきたい。

去る7月6日、朝日新聞夕刊に「発掘に許可制検討—荒される埋蔵文化財に—」(東京版)という記事が掲載された。大阪の朝日新聞にも同日、タイトルは少し違っていたが、本文は略々同様の記事が載っていた。

その趣旨は、考古学ブームによる埋蔵文化財の破壊は目に余るものがあるので、当局で文化財保護法の改正を検討中であり、ユネスコ勧告案(「青考協連絡紙」No.6参照)の線に沿って、①発掘を許可制とする。②無許可発掘の文化財は没収する。③違反者は最低罰金刑とする。と云った考えを打出すということである。その一節を引用するならば「古墳群を社会科の勉強という理由で掘りまくったり、古い墓地から埋蔵品を盗み出す‘墓地荒し’は全国にザラにある事件だ」

又、文化財保護法によって発掘は届出制になっているが、「実情はこの規定は全く無視されている。良心的なものでも発掘をした後に届を出したり、「無届発掘の罰則は最高でも五万円の反則金だけで、はなはだしいものは処罰覚悟で荒しまくるものもいて、乱掘対策は“お手上げ”となっている」云々とある。許可制反対論はすでに春の日本考古学協会総会でも唱えられ、青年考古学協議会の一致した

意見として、連絡紙にも掲載されているにも拘らず、これについては、岡田文化財保護委員会事務局長の話として「許可制にすると学問研究の自由をはばむという考古学者も一部にいたのでその点は慎重にやりたい」と述べられているだけで、改正反対論者からの意見は直接とり上げられていない。誇張のかった荒々しい文意と共に、これが中立公正をモットーとする朝日新聞の記事であるかと疑いたくなった。

埋蔵文化財が科学の立場から正当に評価されるようになったのは、終戦後のことである。従って啓蒙期にはありがちな素人による乱掘の弊が惹起したことも否めない事実である。しかし、そういう中から次第に真面目な研究者が輩出し、彼らが郷土の歴史に情熱を傾けていることこそ、今日の考古学隆昌の真因ではなからうか。彼らの大部分は、それぞれの郷土にあって、働きながら学問にはげんでいる青年達である。彼らの下には、祖国の歴史に深い愛情を抱き乍らも、尚、考古学がどういう学問であるかよく分からない一般大衆がいることを忘れてはならない。

学問が民衆のためのものである以上、わたくしは、発掘の許可制というような官僚統制が、考古学の健全な発達を阻害することを恐れるのであるが、この危険を冒してまで、許可制を強行することに一体どのくらいの意味があるのでしょうか。それで遺跡が救えるなら敢て反対はしないのであるが、伝えられる改正案では、むしろ逆効果を招来するに相違ない。何となれば、当局は文化財保護の根本的理由をはき違えていると同様、文化財保護の目的それ自体を理解していないからである。

今日の遺跡の荒廃は、発掘のための破壊もあるが、その90%までは破壊のための破壊であると云ってよい。乃ち、土木工事によって、破壊されるものが極めて多いのである。すなわち、開墾・道路建設・河川の復旧・建築工事等に関連して、遺跡が発見され、破壊される場合が最も多いのであるが、そのような場合、工事の施工者や現場監督は、たとえそれが大切な文化財であることを感知しても、大抵の場合、工事の遅延を恐れて届出を怠るのが常である。こうしてムザムザ遺跡が消滅し去ってゆく景観を、われわれは今までにいやというほど見せつけられてきた。おそらく誰の目にも気付かずに、闇に葬り去られた文化財は、もっとはるかに多いことであろう。幸いにして、考古学に関心をもつ人々の注意にふれて、とりあえず現場の状況が記録され、或いは残余の遺物が収集され、漸く学術資料として保存することが出来た例も決して少くない。むしろ、われわれの発掘調査の過半数は、こうした個々の発掘が端緒となっているのである。こういうような遺跡破壊の現場に遭遇した場合、少しでも埋蔵文化財に理解をもっている人であれば、たとえ名もなき民間研究者であろうと、一応の緊急調査を行うことは当然である。それを盗掘呼ばわりすることは、もっての他のことである。

文化財保護行政にたずさわる人は中央・地方を通じて極めて少いし、れっきとした研究機関に属して考古学に従事している学者の数にも限りがある。これらの人々がいかに熱心にパトロールをしようとも、工事現場のすべてを監視することは不可能である。従って、当面の緊要な対策としては、文化財を正しく認識する多くの階層の人々に広く呼びかけて、官民協力皆和して、文化財の保護に当り得る態勢を整えることにある。

発掘を許可制にする前に、もっと多くの研究者に対して研究の便宜を与え、郷土を愛する誰もが自由に研究できる機会と場を与えることが必要である。

発掘には特別の技術的な訓練が必要であり、従って誰にでも出来るようなものではない。であるから、好きであるからと云った理由のみで、しろうとや半玄人が勝手に調査を行うべきものでないことは言うまでもない。しかし、また、発掘は一部の学者によって特権的に独占されるべきものではない。官僚や学者が、もし、発掘は自分たち以外の素人にはまかせられないなどという思い上がった特権意識をもつならば、一般大衆は彼らを見はなすであろう。民衆の協力なしに埋蔵文化財の保護は出来ないのであるから、いかに法律を強化してもそれは空文と同じく効果は上がらないであろう。

国民の間にもっと広く深く、文化財の貴重さを衆知徹底し、郷土の歴史と文化に対する愛情と誇りを喚起して、国民の一人一人が文化財の大切な保護者となるように善導する使命を帯びた文化財保護委員会の当局者や、考古学者や、博物館の学芸員といった人々が、自ら文化財は国民大衆のためのものであるということ深く反省し、再認識することこそ、法律改正にもまさって喫緊な目下の急務であろう。

文化財保護のために、具体的にどのような方法を講ずべきかということについては、改めて、皆で考えていきたいと思う。

また、鈴木君のデータでも分る通り、最近では発掘調査も次第に軌道にのり、組織化されようとしているのであるから、この一事によっても、現在の届出制を許可制に切り変える必要は今更ないであろう。

-1957・7・17-

於 同志社大学考古学実習室

—6月例会から—

北海道天売・焼尻島の調査

石附喜三男

題名は上記の如くであるが、私の話の内容は高校在学時代3年間の竪穴住居跡調査旅行に関する、いわば思い出話と云ったものである。

高校1年の時(昭和29年8月)に、私達(札幌西高校郷土研究部)は、北海道苫前郡天売(テウリ)・焼尻(ヤギシリ)の2島の調査を行った。天売島及び焼尻島は、留萌市の北々西に位置する。いずれも周囲三里の孤島で人口も3000人くらいである。

この両島共、これまで全く未調査であったが昭和28年に天売島に観光に行った高校生が土器片を拾得して来たことから、遺跡が存在する可能性が高いと予想されたため予備調査を行ったのであり、竪穴住居跡が発見された。

× × ×

私達の調査した竪穴は、縦5m、横4m、地表から床までの深さ約50cmであって、出土品は擦文式のほぼ復元出来る壺2点、その他土器片数点、Obsidian製石鏃、鉄片等であった。又、天売島は天然記念物オロロン島のいる風景のよい所でもあった。又、焼尻島では、表面採集を行った。

2年の時は、桧山支庁内の瀬棚町利別川川尻の砂丘にある竪穴の調査に参加し、瀬棚式土器を発掘

し、又、3年の時は、札幌の近くの恵庭の擦文式遺跡を実査する機会を得た。

その頃は未だ何も知らないままに、唯調査に参加したにすぎないが、考古学の門をたたき始めたころの思い出話として紹介した。

× × ×

6月の例会は、去る6月15日（土）の午後3時より、同工館考古学実習室に於いて、今夏の北海道調査の打ち合わせ会をかねて行われた。

掲 示 板

- ◇6月20日より同月27日までの8日間、酒詰仲男教授の指導で、堅田直・岡田茂弘・宇田川誠一・安井良三・千代肇・石附喜三男・宮森正勝・坪田嘉子・石部正志・池谷和三・嶋瀬晃栄・平野多加文・匠咲子・吉川汨子らは、京都府下の竹野郡網野町小浜字宮ノ下遺跡を発掘した。同遺跡は現砂丘下に埋没されたもので、且つ海岸線に近接する地点に存したため、すでに遺跡の主体部は波浪浸蝕により失われていたが、砂丘砂直下の黒色粘土層より、斜行縄文の施文された繊維土器・條痕文の施文された繊維土器・山型押捺文土器が層位的に発見され、さらに石鏃・石製刺突器・敲石・鹿角製土搔き及びシカ・イノシシ・鳥骨・魚骨などが発見された。
- ◇宮ノ下遺跡の調査期間中に、同町小浜城山の砂丘中に瓦器・土師質小皿などを伴う有史時代の遺跡が発見され、酒詰教授・宇田川誠一・坪田嘉子らが担当して調査したが、砂丘中に7層にわたる生活面が存し、皇朝銭（延喜通宝か?）・須恵器・瓦質の播鉢・練鉢・椀・土師質の小皿・甕形土器などが発見された。これらのものはいずれも平安時代のものと思われる。
- ◇6月30日、酒詰教授は北海道釧路博物館において行われる博物館大会に出席のため、急行「日本海」にて北海道に向われた。
- ◇7月1日、午後2時より考古学実習室に於いて、網野町下の2遺跡の整理の打ち合わせ会を行った。
- ◇7月21日、石部正志・堀田啓一両兄は土砂採取の目的で破壊がはじめられている大阪府河内市楽音寺古墳群中の向山古墳・鏡塚古墳を実査された。前者はすでに3分の1を失っており、後者も急速に破壊されつつある。
- ◇7月20日より行われている本年度第2次四天王寺趾調査に岡田茂弘兄も参加されている。

編集後記

- ▽編集者の多忙のため、本誌の発行が大変遅れてしまったことを深謝致します。しかしながら、漸く3号雑誌の域を脱して一歩前進することが出来た。今後とも会員諸君の御協力を御願います。
- ▽昨年秋以来、ユネスコ勧告案にともなう国内法規の改正、特に発掘の許可制・届出制をめぐって種々の討論が行われている。そのため、今回はこの問題についての特輯とした。
- ▽この問題について、協会内でも検討が行われているらしいが、実際に発掘調査を押し進めている若い考古学徒の公的発言はあまりないようであり、その意味でも会員諸君の活発な討論を御願したい。
- ▽本誌は先史学会費のみによってまかなっているが、会費を滞納される会員が多く発送費にも事欠く

《第Ⅱ部》『実習室だより』復刻版

現状なので、本誌を充実発展させるために、会費を御納め戴きたい。

編集者 岡田茂弘
昭和32年7月20日発行
発行所 京都府上京区烏丸今出川東入ル
同志社大学先史学会(代表：酒詰仲男)

実習室だより 第5号

1957年8月20日

同志社大学先史学会

宮崎県川南町把言田遺跡について

鈴木重治

1. はじめに

本遺跡は、宮崎県児湯郡川南町教育委員会のもとで、日向考古学会によって六月に発掘調査が行なわれた。筆者は調査の頭初、国立科学博物館へ資料を返す爲に出張中であり現地に赴く事が出来なかったのであるが、それでも住居址の実測には機会が与えられた。

この時得られた資料を中心に本遺跡に関する多少の考察と、発掘された資料を紹介して置こう。

2. 地形及び附近の遺跡 (第1図参照)

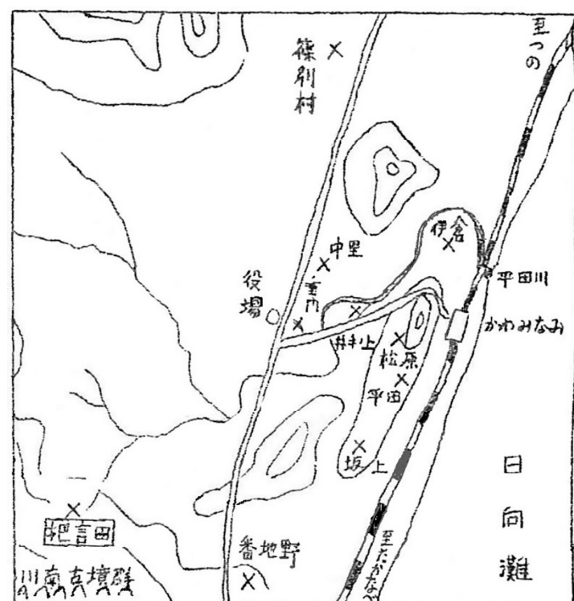
遺跡は児湯川南町把言田にある。川南町は、北は尾鈴山に源を発し、東流して日向灘に注いでいる名貫川、南は大瀬内山より流れ同じく東流している小丸川の間であって、上面木山より流れ多数の小支流を合せ豊かに東流している平田川が町の主要な部分を潤している。遺跡はこの平田川の一支流の源附近にある西に向って漸次高度を増しているゆるやかな凹凸に富んだテラス上にある。現在はこのテラスの南面下には水田が営まれている。弥生期の遺跡として好適な立地条件を呈している遺跡附近に、平田、坂ノ上、伊倉、井手の上、中里、番野地、須田久保、祝子塚、垂門白坂原、国光、柳原、湊治別府、篠別府、西別府等の弥生期間関係諸遺跡が存在する事もうなずけるわけである。又川南町にあつては、西別府一帯に存在する大小の円墳、更に前方後円墳を含めて六十数基をかぞえる川南古墳群(このほど史跡に指定された)を見逃す事は出来ないであろう。

(1) 遺構

本遺跡より見出されている遺構は、1号住居址、埴(からぼり)、及び遺跡の中央部を縦断し此処より北東に通ずる市道の西側断面に窺える三ヶ所の竪穴等である。

1号住居址 (第二図参照)

プラン この住居址を一個の住居と見た場合には、



明らかに変形を呈している。弥生の全期を通じて見られる一般的な円形、矩形ではない。あたかも袖をひろげた羽織の様で、長梯形に矩形が長軸に於いて直角に重なっている様にも見られる。長梯形の長軸、矩形の長軸は夫々4.25m、5.5mであり、長梯形の長軸はN30°Wである。

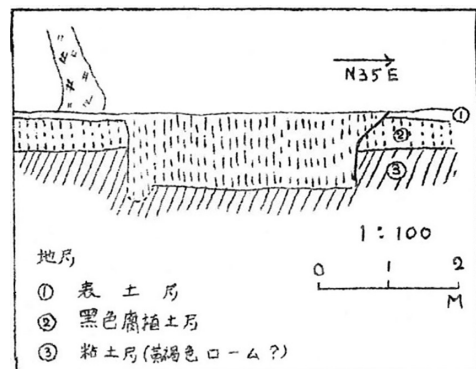
壁 壁は各部に亘ってほぼ垂直に掘られているがa点、b点、c点、d点に於ては他の各点と異って夫々15cm、20cm、25cm、20cmで床面に違している。他のe、f、g、h、i、j、k、lの各点では、35cm、35cm、35cm、30cm、28cm、30cm、30cm、30cmでやや深めに掘られている。

柱穴 柱穴は8個所に見出されているが、そのうちP₁、P₂、P₃のみは住居址床面内にあつて主柱を形成しているものと考えられ、他はすべて西側の壁外にあつて、P₇、P₈の約20cmを除いて、約1m間隔に掘られている。これらは壁柱であつてP₄、P₅、P₆、P₇、P₈、夫々、15cm、8cm、10cm、10cm、10cmの深さを有する。又P₁、P₂、P₃は30cm、15cm、9cmである。

炉 南壁に寄つた住居址内に一個の炉がある。この炉は10cm程度に掘られ、小礫を多少敷いた竪穴の炉でその中から小片の木炭が見出されている。形はほぼ円形で径50cm内外が測れる。

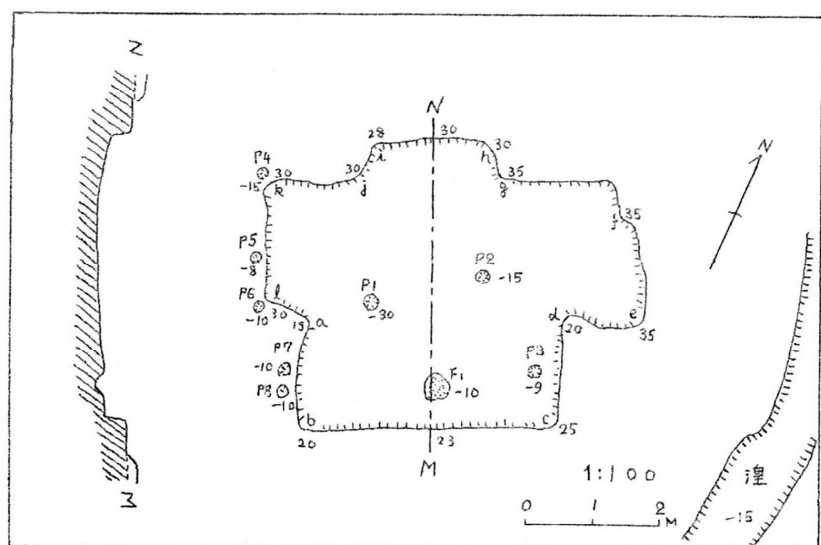
溝 1号住居址の東側約2.5mのところ北より南にかけて、ゆるやかな弧を画いて巾約1mの溝がある。この溝は地形を利用して掘られたものと思はれ深さは溝の中央部で約15cmである。東京都西多摩郡多西村草花で見出されている環溝とも異り、単なる排水溝とする事も出来ようが、北九州、大和地方で見られた環濠集落の構設と同じものとすれば、今後の調査に期待が持てる。

竪穴断面 (第3図参照) 1号住居址の北側、本遺跡の中央部をN80°Eの方向で、巾2m程度の切り通しが通じている。この切り通しの西側の断面には三ヶ所に竪穴断面が窺える。そのうち北側のものは地表面で3.7m、切り通し面で3.3m落ち込みが見られる。層について言えば、第一層の表土は、5cm程度、第二層の黒色腐植土層は40cm程度である。この黒色腐植土層が落ち込んで、竪穴を窺わせるのであり、第三層は黄褐色の粘土層であるが、洪積期のものかは明らかでない。他の2ヶ所の断面でもその大きさは北側のものと大差はない。



(2) 出土遺物

石器 出土の石器のうち主なものは打製石包丁である。石質は安山岩で巾4cm、長さ6cm、刃部の研磨も見られず手法はすべて打欠きである。この種の石器は県内



に十三点あるが、そのほとんどが刃部において研磨が窺えるのに本遺跡のものには見られない。この他石器と言えるものは無いが、住居址外から礫が数点出土している。

土器 壺、坏等の復元可能な土器の他に多数の土器片が出土している。壺は4個あって、胴部以下が欠失している大形のもの一点を除けばすべて小形であり焼成は非常に良好である。底部が残存しているものを見ると、平底が多いが、中には丸底化しているものもあり、胎土が水涌しされていると思はれるものも多い。これらの土器から、この遺跡が弥生後期から末期のものと考えられる。

他の遺物 炉中及び溝の附近から多量の木炭が出土しており、中には径10cm程度の丸太の炭化したものもある。材質は樫ということである。

(3) 考察

川南町には弥生期の遺跡が多数存在しながら住居址が知られたのは把言田が初めてである。調査された住居址は一ヶ所であったが、堅穴の断面等から本遺跡は多数の住居を有する集落と考える事が出来る。1号住居址についていえば、一見一住居址の様にみられるが、住居を復元する立場で考察すれば、むしろ複合住居とも考える事が出来る。現状ではその床面から住居址の切り合いを明確に把握する事が出来ないにしても、地形からして、西より東に床が流れている事実があり、a、b、c、dの各点の壁が浅く、しかもba、cdの壁を夫々北に延せばf g hの壁に続くと考えられるからここに長梯形の一つのプランを考える事が出来よう。勿論この他に考えられないわけではなく、e、f、k、lの矩形のプランが夫々35cm、35cm、30cm、30cmの壁の深さを有することから同一面を考えることが出来るとは云え、これだけでは一住居を考えることは困難である。又住居址内にある三個の柱穴を除いて他の柱穴が壁柱穴として西側の壁に寄って存在することも疑問を呈している。このようにして見ると、張り出し部のある特殊な住居址であるかもしれない。この問題は、本遺跡を更に調査する事によって新しい資料を得てからでないと明言出来ない。

住居の営なまれた時代については、出土の土器が物語る。器形が小さく、文様が無く、極めて変化に乏しい土器であり、中には土師器の様相を帯びた土器もあって、弥生後期より終末期のものと言える。

出土の遺物が問題となるのは、打製の石庖丁である。現在までのところ打製石包丁の分布は四国の瀬戸内海沿岸及び南九州に多く、兵庫県中西遺跡出土の物が本州唯一のものである。弥生中期・後期に多く、一般的に言われている後期になると石器は姿を消すということはこの石器においては通用しない。この石器を出土する遺跡の大多数が小遺跡であることは当時の生産力の不均等性を論ずる時に好資料となる事は明らかである。

南九州の弥生期の集落が明らかにされていない現在、本遺跡が更に調査されることによって貴重な資料を呈するばかりでなく、石器に現われてくる地方の特殊性の上においても重要な遺跡と考えられているので、今後の調査が期待されている。(完)

畿内における古墳の破壊状況

石部正志

埋蔵文化財の荒廃が全国的な風潮となっている昨今、畿内地方において、破壊され、または破壊の危険にさらされている古墳も少なくないので、最近見聞した二・三の例について、手短かな紹介をしておきたい。

大阪府八尾市楽音寺古墳群 西山古墳・心合寺山古墳等、数基の前方後円墳からなり、畿内の前・中期古墳としては珍しくまとまりの良い古墳群であるばかりでなく、保存の状態も大変良好であった。ところが、その一部が土砂採集のため破壊されているとの報に接したので、7月21日、堀田啓一君と実査したところ、向山古墳と鏡塚古墳が破壊中であった。即ち、向山古墳で、墳丘の三分の一以上が、鏡塚では、南側三坪程に亘って、基底から土を取られていた。これが大規模な工事であることは、道路からトラックを乗り入れるために、鉄道のレールを2本並べて、その上に枕木を密に並べて舗装路をこしらえていることによって察せられたが、前日が雨天であったので、その日は工事を休んでいた。鏡塚の被害はまだ僅かなものであったが、東高野街道に近く平地に存在するので、土取りも容易であるから、その後どうなっているのか、気づかわれてならない。

大阪府牧岡市瓢箪山古墳群 生駒山の西側斜面には、もと無数の横穴石室墳があり、服部、高安の千塚として有名であった。瓢箪山千塚は、その北部を代表するものであったが、すでに早く盗掘を受け、さらに石材搬出のために、近年目も当てられない惨状を呈している。早急に手を打たなければ、まだ僅かに完形を留めている横穴式石室がすっかり消滅し去るのも、時間の問題であろう。

大阪府高槻市塚原古墳群 この古墳群の重要性は、淀川北岸、三島郡地方における唯一の後期群集墳である点である。対岸の河内地方には、前記の如く、横穴式石室を主体とした千塚と呼ばれる古墳群はいくつもあるのに、摂北三島郡方面には、塚原の他には同様な古墳群は見当たらない。従って保存の意義も十分あるのであるが、残念なことに近年の開墾によって、大半が消滅し、しかもなお引続き破壊が進められている。

神戸市垂見区広野新開古墳群 これはほぼ旧聞に属するが、昭和29年実査した。平坦な台地上に営まれた円墳群で、20～30基はあったと思われるが、神戸電鉄がここに、住宅地を建設するに際して、住宅地内に古墳があるのは目ざわりになると考え、わざわざ道路が古墳の上を通るように設計して、殆ど全部を削平した。横穴式石室によらない、後期古墳群で、出土の須恵器の型式からすれば、後期の前半のものが多かったようである。

京都府久世郡城陽町寺山古墳 久津川古墳群中の一墳である。この夏休みに山田良三氏が実査したところ、寺山古墳の周囲に新しい木柵がめぐらされていたという。この古墳にも、刻々危険な運命が迫っているのではなかろうか。

安危が気づかれると言え、最近、納得出来ないような処置によって、保存の対象から除外された古墳がある。仁徳天皇陵の陪塚の塚廻古墳、長山古墳、おおさめ塚古墳、大阪市内に現存する有名な、茶臼山、お勝山、帝塚山の三大前方後円墳は、このほど、史跡の仮指定を解除されてしまった。ちょ

うど同じ頃、朝日新聞には、全国的な考古学ブームのために、古墳など文化財の荒廃が著しいので、文化財保護委員会では、発掘関係の法規を厳しくし、国家権力をもって、素人の盗掘を取締り、文化財の保存につとめるという趣旨の記事が掲載された。重要古墳の史跡指定解除と、文化財保護法の強化と、相次いで、官庁がとりつつあるこれらの処置は全く矛盾している。上に挙げた、数箇所の実例中には、素人の盗掘によるものなど一つもない。凡て、土取り、開墾、石材採取、住宅建設等の造成目的の破壊例ばかりである。

文化財保護と、当面行われている文化財保護行政に対して、われわれ考古学徒は、もっと深く考えなければならない。文化財を守ろう。古墳であれ、他の種類の遺跡であれ、文化財が破壊されている現場を発見された場合は、下記の何れかへ直ちに連絡して下さい。今までにそのような物を見聞された方も、それを是非報告して下さい。文化財の破壊状況について、全国的に詳しいデータを知りたいと思っております。

京都市上京区今出川烏丸同志社大学考古学実習室内 青年考古学協会 石部宛

若しくは京都府左京区吉田本町 京都大学考古学教室 関西古墳を守る会 委員長 樋口隆康宛

井戸端会議

酒詰仲男

裏長屋のおかみさん連中が、共同水栓の周り等集って、ペチャクチャ gossipをやるのを俗に井戸端会議と言う。洗濯をやりながらしゃべるのから、全く手を拭って、用事そっちのけで、口角泡を飛ばして論議するのまでいろいろあるらしい。その長屋に大事件が起きた時等は、自然話に身が入るわけである。これをすこし組織立てると、かの戦争中の隣組会議のようなものになるのであるが、そう言う場所では、この種の夫人は余り発言しない。有用なことには沈黙を守り、無用のことに饒舌となる傾向があるらしい。勿論反動的に、正式の会議でleadershipをする市井の夫人も皆無ではない。

今夏は北海道へ旅行して、古宇郡の泊村で照岸洞穴の発掘を行った。この時皆で泊めて貰うことになったのが、稲荷神社の拜殿であった。本殿が宝永頃、ニシン漁の繁盛期に資を尽くして、北陸の宮大工達に工作させたもので、軒かざりから、登り竜、降り竜の柱飾りに至る迄、当時として仲々の傑作に属する。土地でもそれに気がついて、風雪に晒されて破壊するのを防ぐ為、本殿全体に覆いをし、ついでに60丈敷程の板間を作って、その半分以上に畳を敷き、台所も、手洗いも附属していて、部落の集会場にもなっているのである。毎年夏期発掘では、板敷きに寝ることも多いので、今年はこれでも結構な方である。

そこで約10日程自炊している間、われわれはその小さい部落の水仲間になったのである。と言うのは、そこは絶壁をもって海に臨む台上の地点で、基盤は岩であるから、各戸毎に簡単な井戸を掘ると云うわけには行かない。岩間から流れ出る冷水を、掛樋で集めて溜めて置いて、それを部落全体で使うのである。朝、洗顔する水から風呂の水迄汲む。日常の用水は、その都度汲むのも苦であるから、朝一荷ずつ擔いで運んでおいて、水甕に入れておいてそれを使う。風呂ともなると一荷位は済まされ

ないので、自然入浴は難行の一つになる。真夏でも汗をかくことの少ない北海道のことだから辛棒も出来る。水を大バケツに入れて、前後にブラさげておくことは、仲々訓練を要する芸当である。われわれの仲間が擔ぐと、台所へ運ぶ迄に、半分位なくなってしまう。鍋のふたを浮かして置くと、ピチャピチャ泡立ってこぼれることが無くなるのであるが、これは知る人ぞ知る鳥渡した工夫である。洗い等は水のいる仕業である。そんな時に、主婦達は、自然井戸端へ来てそれをするようになる。漁師であるから、イカをつくったり、魚を料理するすることも多いが、それも大概井戸端でやってのける。流石に洗濯は井戸端でしないが、それでもそそぎの段階になると、これも井戸端へ持って来る。その井戸端は相当不潔になる。水は厚い石で囲んだ四角な水溜に入っているもので、汚水の浸入する畏れはない。そこに柄の長い大きな杓がついていて、それで二三杯汲むとバケツに一杯になる。咽頭を湿らす為に茶碗も置いてある。流しは板敷になっていて、魚の腹等は、その板ノ間から、すぐ棚の崖下へ転落して行く。途中にひっかかったのをからすが啄みに来てくれると言った調子である。それで井戸の周辺は先ず清潔と言ったところである。

ところで、幾日かこの水仲間に入れて貰っている間に、顔を合わす人達に、自然「お早うございます」「おぼんでございます」（北海道ではこんばんわは通用しない）と挨拶をかわすようになる。来るのは大概主婦とか、娘さんとかで、男はめったに来ない。一いち穿鑿した訳ではないから、未だどの顔が、どの家の住人か解る迄には至らなかったが、それでも「おつかれさんです」とか、「京都くんだりから来て随分大変だね」など声をかけてくれるので、次第に親しみを増して行くことになる。これが水仲間と言うものであろう。

井戸を掘ることを知らなかった石器時代人がこの水仲間を組織していたことは間違いない。石器時代の集落は、言わば泉集落であって、その湧水を利用し合っている同一部落民は、皆こうした水仲間であったはずである。そこに登場するのは、やはり多くは女共であって、女達となれば、やはり井戸端会議も開かれていたことであろう。時間は制約のない石器時代人のことであるから、彼女等の井戸端会議はいと盛大に、延えんと継続したことであろう。井戸端会議の起源も、こう考えて来ると、それ程新しいものではないと言うことになる。

ただ女権の変遷につれて、この井戸端会議にも消長のあったことは争われない。女性が主権を握っていた石器時代のことだから、亭主の酷評等が、相当談笑の中心になったことは論を待たない。尤も毎月取ってくる月給がすくないと言うのでなく、「うちの人はシカを追いかけても、いつも逃がしてしまうんですよ」「先日もうさぎを追いかけて、自分で落とし穴に落ちたんですよ」「クジラを追いかけて、怖いと言って泣きベソをかいて帰って来んですよ」「細い木を一本伐るのに、石斧の柄を三度も折るんですよ」そのrefrainに「だらしが無いいたらありゃしない」と言ったところである。村の渉外方面を除いて、内省的運営の大部分、財政面から、教育面に至る迄、これ等の女性によって万端決められていたのであるから、彼女等の鼻息の荒かったことは、真に想像を絶するものがあった。

これをその後の封建社会のものと比較して見ると全く別である。そこでは女性はすべて男性の付属物にされてしまい、奥方や、細君は、井戸端会議等から全く遮断されてしまう。その頃井戸端へ集って来る女性は、下女とか、洗濯女とか、所謂はしたなきおんな達に過ぎなかった。そこで彼女等の嘆

きは、世を預かる上の方の愚にもつかない悪評であったり、身の程をはかなむ嘆息であったり、せめて性談にうさを晴らす位が関の山であったろう。尤も町人の間には、はからずも盛大な井戸端会議が残っていて、これは被圧政者達の悒憤の捨てどころとなったことも考えられる。岡っ引きが赤腰巻の鼻連（かかあれん）の放談を、ぬすみ聞きする情景は、中々ユーモラスでもある。

これが明治時代の所謂下層階級にも受けつがれて、国会に対比して所謂井戸端会議なる新造語が咄し家、講談師によって使われるようになったものと思われる。今でも都会の遊ばせ夫人達はロビーに集ることはあっても、井戸端には出て来ない。但しこの北海道の泊村の如く、時によって石器時代の水仲間の如きものが残っているのは興味がある。私自身岡っ引きではないが、泊村の井戸端会議の話題をひろって見たらどうだったろう。女性解放期の昨今、石器時代のものの如き、建設的意見をそこで果して聞き得たであらうか。或は単に所謂隣近所の悪口誹謗に終始したものであったらうか。

(昭和32年9・12)

掲 示 板

- ◇武田桂治君は郷土広島で就職した由、慶祝の至りである。
- ◇石部正志君は4月から大阪府庁へ連日臨時勤務することになり、比頃は岡田茂弘君と坪田嘉子君と、その他本年度の考古学の考古学のゼミの連中が最も多く出入りしている。
- ◇山田良三君は今回京都府宇治市神明宮東は73へ移転した。
- ◇本講は7月15日に前期授業終了。7月16日から大津市産業文化館で、一週間に互り博物館実習が行われた。
- ◇酒詰は6月30日京都発。7月2日から5日迄釧路で開催された第5回全国博物館大会に出席し、その後根室、止若（ヤムワッカ）、置戸、網走、札幌、室蘭等を博物館見学と就職開拓に歩き、24日から古宇郡照岸洞窟発掘に参加した。その後8月4日から5日迄神恵内洞窟も調査し、同6日には一同札幌石附喜三男君宅に引き揚げそこから森浩一君の一隊と合流、大沼の千代肇氏宅におり、その間に恵山方面の貝塚、大沼附近の遺跡を実査、訪採し、15日に京都に帰った。
- ◇本年の夏季発掘参加者氏名は以下の如くである。
千代肇 堀田啓一 池谷和三 森浩一 小林康徳 三木陽子 岡田茂弘 山脇節子
宇田川誠一 石附喜三男 宮森正勝 坪田嘉子
- ◇照岸及神恵内両洞窟及北海道旅行談については引き続き本紙に発表する。9月16日から後期の登録が始まるので、それから精査に着手する。
- ◇北海道へ出発する前堅田直君を主班として行った京都府網野遺跡の調査についても同様である。
- ◇深草谷口町に晩期縄紋遺跡が発見された。京都としては珍しいことである。

(酒詰記)

編集後記

▽本会では10月6日より土曜日毎に談話会を持つ事にした。主旨は真に学問をやろうとする者の集り

で一人は読書解題をやり一人は研究発表をする事に決定した。しかし会は固苦しいものではなくなごやかにやっている。

▽本会は8月末には皆様のお手元にとどく様に原稿も揃って居りました所、原紙を切る者が事故を起し遅れました。お詫び致します。

▽秋です！ 皆様勉強にはげもうではありませんか。

編 集 者	岡田茂弘
発行年月	昭和32年 8月20日
発 行 所	京都市上京区烏丸今出川東入ル 同志社大学先史学会
代 表	酒詰仲男

実習室だより 第6号

1957年9月20日

同志社大学先史学会

一壺の価値

—奈良の考古学協会総会から—

酒詰仲男

1956年5月16日附で、ユネスコから、日本の考古学界を対象として、発掘を許可制にすること、外人にも発掘を許可すること、遺物の一部を外国へ持ち帰ることも許すこと等30項目に亘る勧告書を寄せて来たことは周知の事実である。それに応答すべき時機も近ずき、種いろの動きがある。勧告であるから、応じ得べきは受け、然らざるものは拒否すればよい。その場合国内情勢の判断が問題になる。実際問題としては、平間文化財課長から、藤田亮策日本考古学協会会長宛に、それについての諮問があり、同会長は、会員の総意を代辨して、本年初夏それに応答したことになる。今後はそれと、各方面の資料、意見を調整して、原案をつくり、ユネスコに回答する一方、それに適応するよう、文化財関係法規の一部を改正することが、次の議会、遅くとも次の議会に諮られる運びとなっている。他の條項はともかくとして、考古学上調査発掘の仕事が、それによって、許可制となる一事をめぐって答申を了えたわれわれも、なお一つの責務が残っていることを考えさせられるのである。

戦前から戦後にかけて、発掘が全く自由であった時代から、ここ数年間の届出制の時代を経て、一転して今度許可制の時代へ進む訳で、考古学上の調査も、ここで一つの曲がり角へ来ていることは確かである。許可制と言えば、時代に逆行するとも考えられ、新法規の運営を一步誤まれば、折角順調に発展して来た、この国の考古学が、一頓挫を来たすことにもなり兼ねない。その為にこれに関心のあるこの方面の有志は、一喜一憂するのでもある。

誤りのない推測が、唯だ一つだけ許される。それは総ての法は、既成の事実を根拠として、その上に打ち建てられるものであることである。その運営もまた、その事実の世界で行われるものである。法規は宝刀であり、利劍ともなり、兇刀ともなり有名無実ともなる。

日本に銅鐸と呼ぶ考古学上貴重な遺物がある。それは全国で凡そ200箇程発見されているのであるが、その発掘現場に、われわれ専門家が立ち合った例は、今日まで僅に数例に過ぎない。それは何を意味するのであろうか。ダム工事、開発事業で、年年夥しい遺跡遺物が、破壊されて行く。民間の好事家や、小、中学校生徒による遺跡遺物の破壊が、屢々新聞紙上を賑わすが、そんなのは九牛の一毛、とるに足りぬ問題なのである。工事担当者の言を借りれば、「期日に違約すれば、一日数万円、数十万円の罰金を課せられるんですからネ」と言う。遺物遺跡の存在等に気をくばっている暇はないと言うのである。全く空手でそれを阻止することは出来ない。今のままでは、新しい法規が誕生し、許可制が施行されても、考古学者以外の土木業者、一般農民達による遺跡、遺物の破壊は、依然とし

て横行するのであろう。誠実に文化財を研究するものの仕事だけが妨げられて、大々的な破壊の方は、相当変と言うことになるのである。

日本の考古学界は、中共の今日のあの盛大なる考古学研究の淵源をつくり、師父たるを以って任じている。事実これは、世界的水準に達しているものとも自負している。今日の中共では、一野老が発見した一壺が、貴重なる一大遺跡の発見、発掘の動機となっている例もすくなくないと聞く。一般の大衆の文化財への関心が、それ程高まっているのである。日本では壺等発見すると土木工は先ず鶴嘴で穴をあけ、中に宝物も入っていないと解れば、微塵に砕いて道に敷いてしまう。然し長野県平出遺跡の如く、一壺の緑釉土器が、あれだけの成果を収めた実例もないではない。一壺の価値の認識如何によって、それが至宝ともなり、一介の塵ともなるのである。

中共では、次々に行われるある大土木工事場で、たまたま遺物が発見され、それが遺跡であると解れば、直ちにその工事の中止を命じて、緊急調査隊を派遣し、その調査の完了後でない、仕事の再開を許さぬと言うことである。それには法規があり、それが誠実に実行されているのである。イラクの如きは、農夫が今日耕している畑でも遺跡であることが解ると無償で明日から他へ移転せねばならないと言う。土地の狭いわが国などでは、全く嘘のような話である。ただこうした仕事の方面に、どれだけの仕事を費やすかと言うことが、大きな基本的な問題である。それは輿論が決定する問題でもある。その輿論は文化財の価値を認め、文化国家の真義を辨えた人が、どれだけ量いるかによって決定される。われわれ考古学者は、博物館活動を、考古学上の研究活動と直結することによって、かかる情勢誘致の助けをしようとしているのである。何となく途は遠く、靴の上から足をかく思いではある。然し許可制になる迄に、是非ともこうした情勢が、成立していなければ困るのである。

奈良市で開催された、本年10月末の考古学協会の討議会の席上で、漸く上述のことが解ったのである。応答した藤田協会長の責任を追求するのではなく、彼を助け、彼を鼓舞せねばならぬのである。われわれ全会員は、個人個人の責任に於て、今一層強力に大衆の啓蒙に乗り出さねばならぬのである。中共では、文化遺産の為に、大土木工事を休止することが可能であるのに、むしろその方の先進国である日本に於て、なぜそれが不可能なのか。否、それを可能にするところまで、しかも短期間に事態を改善せねばならぬのである。

これは国内的には、文化国家の水準を高めることにもなり、国際的には、最も端的に、平和国家の表看板を誇示することにもなる。生れる法規が、徒に取締のための法規となることなく、又空文化しない為に、われわれは残された時間を、充分に、悔なく利用せねばならないのである。考え得る、あらゆる手段と方策を講じて、われわれ自ら啓蒙の先頭に立たねばならぬのである。文化財は、その骨董的価値は別として、例え一壺たりとも、われわれ祖先の血となった至宝であり、それは無上の教材でもある。

ユネスコは更にそれを拡大して、それは地上の全人類がお互い国情を理解し合い、世界の平和を維持する資材ともなると確定しているのである。その考えは正しく、さればこそわれわれも腰を上げようとしているのである。

各省の割椽と言うこともあろう。国家予算の窮乏と言うこともあろう。民主主義の一枚看板が、逆

効果を生じている場合もあろう。その個々の事実について、今それを検討し、それを改善している暇はない。一つのことは、一つの事実は、大衆がそれを理解し、それを欲すれば、途は自ら拓けるのである。

明敏なる諸賢の協力を得て、何とかこれを一大国民運動にまで拡大、強化し度いものである。

(昭32年10・5)

奈良県大川遺跡予察紀行

酒詰仲男

昭和32年9月15日。老人の日である。午前9時橿原国史館前集合。同行者は土井橿原公苑長、奈良県文化財小島俊次、地名研究所池田氏、網干善教氏及予の5名であった。開発局の車を都合してもらった。定刻9時に出発。川添村中峯山に行くには、奈良市から登る道と、天理からする道がある。今日はその方が途が良いと言うので、天理から入る。途中迄は都介野遺跡へ行く道と同じであるが、針ノ別所を経て、そこから一路中峯山へ赴く。予定の11時丁度に、中峯山今出屋旅館の前につく。西久保川添村教育長、藤田小学校長、福田先生達の出迎えを受け、先ず昼食。アビアユの塩焼は珍しかった。食後直ちに遺跡へ赴く。途中長峯の墓地による。長祿（西暦1498_二）の五輪塔があった。そしてここに両墓制のあることを認めた。死体を埋めた方で、四十九日迄の祭を済ませ、後はまいる墓の方ですと言う。火葬にはせず、土葬にして小さい山をつくるそうだ。宗旨は真言宗で、まいる墓の方は、非常に密に立っており、斜面の高い方が旧い家とのこと。大川遺跡は、約半年程前、土井氏がこの村の金石文を調査に来た際、この名張川の対岸にある、崖仏を見に入ってきたところ、乗って来たオート三輪が故障したため、止めどなく附近を徘徊するうち、偶々土器片を採集し、それがこの興味ある遺跡発見の端緒となった。名張川はここで強く廻転していて、これに囲まれた岬状の台地の中央及それと300米ほど距った、もう一つの地点と、都合二ヶ所に包含地がある。土器は早期の押型文土器と、磨消縄文のある焼成のよい薄手のもので、表面には、土師と須恵なども散布している。小島氏は押型文一片を拾った。最近まで、ここに民家があったとかで、陶器片もある。畑の上の山裾が旧道になっていて、その先の渡しを渡ると、三重県である。上述の磨崖仏も、大和側の岸からよく見えるが、三重県に所属する。この台上の約5分の1位は茶畑で、あとはサツマイモなどの畑になっている。面白いことは、ここでクリの苗畑を発見した。相当育つと、山へ移植するのだそうである。1時間程採集し、大体発掘の打合わせを済まして帰路につく。旅館の近くでキュウリの集荷場を見学した。ヤマトサンジャクと言って、珍しい細長いキュウリである。戦後桑園を止めて、こうした野菜を作りはじめ、仲々収益を挙げている。もう最盛期を過ぎたと言うが、仲々大がかりに荷造りをしている。キュウリが長く、真直ぐにのびるように、割竹をあてがって、しばってあるのを目撃した。面白いことをやるものである。この集荷場の庭前にも、五輪塔が、三基ほど立っていたが、いずれも年号は不明であった。一旦宿へ戻って、それから広瀬遺跡を見に行く。山の上で車を捨てて、あと10分程険しい坂を降りて行くと、立派な釣橋の袖へ出る。大川より2軒程上流である。そこに寺と、小学校と数戸の

民家が塊まっている。この集落の200米ほど先の、川へ伸び出した低地の中央周囲の田圃より一段高くなった桑畑が遺跡である。地形は大体大川と酷似している。土器は大体後期らしい。学校の先生方が発見されたものと言う。川のすぐへりに、立派な六地蔵が立っていた。年号はないが、土井氏によると江戸時代の初期のものらしいと言うことであった。その先で梁を見る。細い竿竹を並べて組み、その先を20°位上昇させてあるが、全体は長さ7間、巾5間程の縁台で、●から出る随所に、ササがさして誤魔化してある。これが川中の約3分の1位を占めている。側に番小屋があって、見張りをしている。勿論放流のアユであるが、多い時には一日に5、600匹もかかるそうだ。ササの葉に紛れて、アユが竹の床に跳りあがったところを、手網ですくい上げるのだと言う。戻りに小学校へ立ち寄って茶菓を供され、隣の西芳寺蔵の快慶作の仏像を見る。手の一部に多少後補があるだけで、美事なものである。これも村史編集の副産物として発見され、目下重美の申請中と言う。芳名録に、網干氏が、達筆を振って、われわれ全員の名を記して呉れた。釣橋の向こうには、名張行のバスの停留所もあるそうだ。帰途は逆に急坂をよじ登り、車の待っているところへ辿り着く。更にもう一度今出屋の前へ戻る。ここでヤマトサンジャクの数箱を土産に頂き、今日半日案内された村の教職員の方々に訣れをつけ、一路天理市へ突っ走った。

今日聞知したこの附近の遺跡地は以下の如くである。

- 川添村中峯山大川（二ヶ所） 早期又後期縄文、土師、須恵、石鏃
- 今村広瀬（二ヶ所） 後期縄文
- 今村片平 石器1個
- 東山村室津字彼岸講（阿武山麓） 石鏃1個
- 豊原村岩屋 古墳
- 山添村波多野字逢瀬 縄文土器？
- 今村上波多神社 経塚 慶長の棟札がある

実習室消息

- 9月9日 網野町中矢徳治氏来室
- 9月15日 酒詰は別記の如く、土井樞原公苑長等と、奈良県大川遺跡の予察に赴いた。
- 9月16日 大下文学部助手アメリカに向かって出発
- 9月17日 石部正志、坪田嘉子、千代肇、岡田茂弘の諸君の顔が揃い、研究室は頻に賑やかになった。
- 9月23日 岡田茂弘、石附喜三男の両君は、本教室への寄託品運搬のため、三重県拓殖町村主種二郎氏宅へ赴いた。嶋瀬晃栄姉は、宇野茂樹氏による滋賀県湖東方面の古墳発掘を見学した。
- 9月24日 研究室に於いて、9月例会を兼ね今夏北海道地方旅行についての談話会を開いた。酒詰が概説を、森浩一氏が照岸洞窟を、酒詰及坪田姉が神恵内での活動を、千代肇氏が恵山貝塚及古武井遺跡の発掘について話した。
- 9月27日 後期最初の考古学実習があり、二隊にわかれて、一隊は研究室に於て、神恵内洞窟遺跡の遺物の整理に当り、もう一つの組は、相国寺の墓石の調査を行うことになった。

9月28日 土曜日午後、大学院石部正志、岡田茂弘両君の主唱で、研究会進発の相談会があった。これは読書会をかねて、出席者が交互に研究発表を行うもので、勿論異議なく会は成立した。なおこの会で、研究室の共同のテーマも、機会あるごとに取り上げて行くことが酒詰から提案された。

9月30日 関西博物館学芸員協議会へ出席のため、酒詰はこの日午前中須磨水族館に赴いた。

◇今日午後徳富芦花没後30年の紀年に、同志社大学に於いて同氏に関する紀年講演会及展覧会を催すことになり、その第一回会合が、中学校応接室で開かれ、酒詰が、その実行委員の一人に選ばれ、展覧会の世話をすることになった。

◇今日迄の研究室での調査について下の如く決定した。

網野遺跡

a 宮下 堅田、岡田、宇田川

b 城山 酒詰、宇田川、

神恵内観音崎

坪田

同洞窟

酒詰、坪田、その他

泊村照岸洞窟

千代、石附、宮森、岡田、酒詰

古武井遺跡

千代

(以上酒詰記)

昭和32（1957）年10月1日
京都市上京区今出川学内
同志社大学先史学会
代表者 酒詰仲男

実習室だより 第7号

1957年10月20日

同志社大学先史学会

青森県最花貝塚発掘断章

酒詰仲男

1. はしがき

青森県最花貝塚は昭和21年土地の人びとによって発見され、発掘も行われたが、翌年八幡一郎、中島寿雄氏等によって、本格的な調査がされた。

昭和26年、県当局の依頼によって、下北半島の総合調査が行われるに際し、われわれ人類学班は、本遺跡から人骨が嘗て出土したことを聞き及んでいたもので、これを発掘することとした。発掘に参加したのは鈴木尚助教授、大学院学生埴原和郎、香原志勢（以上いずれも当時）、北沢八重雄補手及予であるが、加藤孝、松平義人、中島金二、笹津備洋、橘善光、佐々木守、秋浜知行の諸氏の援助も得た。総合調査に参加した、外の方の諸氏にも、色々お世話になった。本稿を草するに当たって、上記の人びとに、深甚なる謝意を表す。

2. 発掘経過

8月4日 前日、埴原和郎君と当地に来着した予は、本日鈴木尚助教授、北沢八重雄氏等を迎え、最花遺跡の予察に赴いた。

8月5日 本日から人夫を雇い、本格的に発掘を開始した。四方の2区画を設け、両区を同時に掘り始めたが、貝層は部分的にしか認められなかった。

8月6日 続掘。焼け丸太、灰層、サルボウの部分的な純貝層等を発見。一区の方は平均1米の深さまで掘った。

8月7日 続掘。最下層迄掘った部分もあるが、人骨は出ない。

8月8日 今日迄掘ったところをa地点と名付ける。a地点から人骨が発見されないので、八幡一郎氏等が先年発掘した東へ寄った畑を掘ることに決定。農作物の関係で、旧発掘区の南側道路を掘ることとした。b地点と名付ける。a地点第2区からは、自然石で囲んだ炉が発見された。

8月9日 a地点の方、第3区を設け、それを掘る。床らしいものが出て来たが、一部分だけだった。b地点の方から、遂に人骨を発見したが、保存は不良であった。

8月10日 a地点の方発掘終了。b地点の人骨は側臥屈葬と、仰臥伸展葬の二体であることがわかった。b地点の方も、骨をあげたのち、直ちに埋めはじめた。今日午前中に発掘品を、田名部、常念寺へ運搬。予は夕刻遺跡全体の歩測を行った。

3. 遺跡

最花貝塚は、青森県下北郡東通村大字最花にある（以下省略）。

4. 自然遺物

(a) 貝類 Mollusca

(イ) 腹足類 Gastropoda 1、ホソウミニナ 2、ツメタガイ 3、アカニシ 4、バイ 5、マイマイ類

(ロ) 斧足類 Pelecypoda 6、サルボウ 7、ホタテガイ 8、イタボガキ (孔のあるもの) 9、カキ 10、ニホンシジミ 11、マシジミ 12、カラスガイ 13、ハマグリ 14、カガミガイ 15、アサリ 16、ウバガイ 17、バカガイ 18、サラガイ

(b) 獣類 Mammalia

一般に大きい動物の骨の方が、小さい破片になっている。骨髄迄食用に供したものであろう。

1：サル、下顎。相当大きい。老成したものである。2：タヌキ、下顎骨。3：アナグマ、下顎骨。4：ウサギ。5：イルカ。6：イヌ。下顎骨破片、尺骨、脊椎骨等量相当に多い。7：クマ、上顎骨破片2ヶ、第2区 (a地点) 貝層内より出土、なおこれに関する骨が、他に二、三あるようである。8：イノシシ、シカに比して、非常にすくない。下顎は成獣2頭分 (a地点第1、第2区出土) と、仔獣1頭分の破片 (a地点第1区) があるのみである。9：シカ、すくなくとも10頭分。鹿角の大なるもの2つ。うち1本はa地点第2区の炉辺にあった。その他角の小破片。不思議に頭骨の破片少なく、下顎は殆どすべて、小さく破れていて、20数片ある。肩甲骨も、上端関節部の破片のみでも10数ヶを算える。蹠掌骨、長いまゝのもの、小破片など多くあり。上膊骨、距骨、跟骨、指骨等も多い。10：クジラ 肋骨及肢骨。

(c) 爬虫類 Reptilia

(1) ウミガメ類、指骨数個出土。

(d) 鳥類 Aves

(1) ハクチョウ 上膊骨の破片数個出土。(2) カモメ? 膊骨。(3) カモ?

(e) 魚類 Pisces

(1) スズキ。(2) カレイ類。(3) マグロwirbel 8個以上。a地点第2区より、続いて発見した。(4) フグ類、歯板1個

(f) その他

灰、木炭、岩石類、やけた丸太など。

5. 人工遺物

(a) 石製品

石製品には、磨り石、石弾様石器、槌石、小楕円棒状の石、石棒状の石、磐状の石、礫器、裂器、粘板岩片、打製石斧、石鏃、石匙、鴨足型石器、石棒、磨製石斧、異形石器等があった。その主なるものについて記すると以下の如くである。

(イ) 磨製石斧

石は大部分が、深緑色を呈している。半欠品のみ6個で、全器形は不明であるが、胴に比して、刃部に及ぶ程、細く薄くなり、太い中央部の断面は、楕円形である。勿論磨り戟りもある。

概して普通の磨製石斧は深く、磨り截りは浅く発見された。その中の一個で、磨製石斧を、磨りものに利用したかと思われるものもある。やや完全なるもののうちの1個は、肉の薄い、乳房状石斧形のもので、a地点第Ⅱ区出土品である。幾分反りがあり、刃部の中も広く、一部に不規則な凹みが残されている。今一つは長さ8cm程の、肉の薄い、頁岩製のもので、a地点第Ⅱ区出土品。刃は非相称的で、一方がのび出している。欠失品のうちには、左右相称のものもある。今1個は、頸の部分の破片である。これ等の外に、長さ4cmばかりの、小磨製石斧が1個ある。刃部が欠損している。a地点第Ⅱ区の貝層上部から出土したものである。

(ロ) 打製石斧

一面は関東地方に見られる如き自然面のままの、短冊型打製石斧で、同類のものが2個ある。1個は打ち欠いた方の側の肉が、盛れ上がっているが、今1個の方は薄く、半欠品である。前者はa地点の揚げ土から発見されたもの、後者はb地点の出土品である。

(ハ) 礫器

礫器と言っても、関東地方の縄文前期等に多く見られる、自然石の一端を打ち欠いただけのものではない。原石を大きく打ち欠き、retoucheを入れたものが多い。ただその中で、形のやや調ったものと、然らざる破片とがある。硅岩、硬砂岩、燧石等各種の石質のものがある。形が整っていると言っても、従来の石器のどの形かに属するものとは言い難い。こうした石屑とも言うべきものは、東北地方の遺跡の特産物の一つとも言えよう。採集したものの全部で約30片、一般のものは約130片もある。

(ニ) 篋状石器

長二等辺三角形に近いもので、燧石製と硅岩製のものとがある。

(ホ) 石鏃

有柄のものが4個ある。全部有柄で、うち2個は肉が厚い。1個は黒曜石製。1個は硅岩製。他の2個は凝灰岩製である。

(ヘ) 石槍

全部で5個ある。うち2個は無柄で、5cm以上あり、有柄のものは3個で、3cm前後である。前、後者共黒曜石製が1個ずつあり、大きい方の他の1個は硬砂岩製、小さい方の2個は、凝灰岩製である。

(ト) 石匙

長径2乃至5cm程。小型。楕円形。黒曜石製のもの1個と、所謂womans-knifeとよばれる、刃先の尖った、長さ5cmばかりの硅岩製のものとがある。

(チ) 槌石

扁平な円形の石で、側面が多少磨滅しているもの。或は打痕のあるものが2個ある。打石斧の断片の如きものが8、楕円形で、長軸の一端に打痕のあるもの8。石皿の上などで物を打ち砕くのに使用されたかと思われる。

(リ) 砥石

砂岩製の断片であるが、表裏2面に顕著な平たい磨り跡がある。今1個は花崗岩で、石包丁の如き形のものであったろうが、その半欠品である。一面は磨き、反対の面は打ち欠きになっている。刃は横につけられていて、横断面は三角形で鋭い。この外楕円形の軽石や、その破片が多く発見された。多分これ等も砥石に用いられたものであろう。

(ヌ) 石棒

砂岩製の無頭。細形の石棒の破片と思われる。a地点第Ⅱ区、貝層下の出土品である。石棒とも断じ難いが、細長い石は非常に多く存した。

(ル) 異形石器

一面は平、一面は中央に稜があって、尖端部は一方に扁して尖っている。中央の破折部にも磨いたあとがあり、独鈷石様石器の半欠品かと思われる。

(ヲ) 石皿

安山岩製。長めの楕円形のもの。a地点の第Ⅰ区及第Ⅱ区の貝層中から発見された。と言うのは断片として発掘されたところを継ぎあわして、全形を推すことが出来るほどになったのである。脚はない。この外に平面に多少打痕のあるようなものが2個ある。

(ワ) 磨り石

円形の様々の石質の磨り石が9個ある。長い棒状で、一端を磨いたものが2個。完全に採集したら、発掘品だけでも、20個以上あったと思われる。

(カ) 石弾形石器

ラグビーの球のような形をした、よく磨いた所謂石弾形石器が2個ある。これ程明らかに加工はされていないが、丁度握りころの石が2個ある。或は粗製の石弾か。

(ヨ) 平石

これは自然石であろう。然し捨てかねて採集したもの20個に達する。土器の台に使用されたものではなかろうか。

(b) 貝製品

イタボガキ製の貝斧1個。a地点第Ⅰ区貝層中より出土。

(c) 骨角器→省略**(d) 土製品→省略**

(以上備忘録として記録して置く。図省略)

掲 示 板

10月4日 今日から蘆花展の準備を開始。10月7日から10日に亘り、東京蘆花恒春園に、千代、石部両君と、酒詰は、蘆花の遺品をとりに行き、10月12日(土)と13日(日)の両日に亘り、展覧会を、啓真館二階で開催。盛会であった。続いて、10月15日から17日に亘って、全遺品を返却に行き、帰学した。芦花はキリスト教を基調とした、明治中葉の積極的な社会 reformerとして、近頃再評価

されつつあるものらしい。

10月15日頃から月末まで 岡田茂弘君は、文部省文化財主催の、天王寺址発掘を手伝った。

10月中 酒詰は、堆積した実習室の遺物の再整理に努力した。然しまだ仲々完了しない。

10月24日夜 和歌山県稲原の巽三郎氏と、田辺市の羯磨正信氏とが、酒詰の私宅を訪問。日高川から出た、旧石器らしきものを持参したので、案内の宇佐晋一氏をも交じえ、千代肇君、岡田茂弘君と実見した。石質は flint の外面は腐ランして、割り口でないといけない。ものはいずれも三角柱状であるが、もう一条細くはぎ、四角柱となっている。両端は同じ方向へ70~80°傾斜している。数個持参されたが、いずれも同じ手法のものである。ブレードの一種と見られる。それ等は昭和27年の台風で、日高川の河成段丘が破壊された為、そこから発見されたのだのだからと言う。表面から2米以上も深い礫層の上の粘土層から出土した。残念ながらこの部分は、現在築堤の基礎となっていて、再発掘は不可能だという。

- ◇ 酒詰は本学期も修士課で引き続き東北地方の貝塚について講じ、博士課程のほうでは、Prehistoric Europeの購読をしている。

10月29日 翌日から奈良で開かれる秋の考古学協会総会の研究発表等傍聴の為、宮崎博物館の鈴木重治君が入洛した。全日 全会出席の為、和島誠一君、酒詰宅に来泊。ユネスコ勧告案をめぐる考古学的発掘許可制の問題について懇談した。

10月30日 考古学協会総会第1日。午前中文化財研究上に於て、総会を開き、訪中委員の報告、その他各報告を聞いたが、その後ユネスコ回答案の問題で、再討議を行った。その結果、われわれの知り得たことは、酒詰が6号に「一壺の価値」として記述したごとき結論であった。

- ◇ 10月末福岡で開催された第12回日本人類学会、日本民俗学協会連合大会で、酒詰は森浩一君と、今夏の北海道照岸洞窟の発掘について話す等はずであったが、兩人とも講義の都合で出席できなかった。
- ◇ 考古学談話会の発表は次の通りであった。

10月5日	研究発表	石部正志	「古墳の立地と外形」
	読書課題	平野彗加文	「経塚」
10月12日	研究発表	岡田茂弘	「縄文文化概観」
		池谷和三	「埴輪研究史」
	読書課題	石附喜三男	「芹沢長介著〈無土器文化〉」
10月27日	読書課題	宮森正勝	「江坂輝弥〈縄文文化〉」
		坪田嘉子	「奈良教委〈珠城山古墳〉」

(以上酒詰)

昭和32(1957)年11月1日
京都市上京区今出川内
同志社大学文学部内
同志社大学先史学会
代表者 酒詰仲男

実習室だより 第8号

1957年12月1日

同志社大学先史学会

目次

	頁
奈良県大川遺跡の発掘	酒詰仲男 1
網野紀行	酒詰仲男 4
新収遺跡処々	酒詰仲男 7
掲示板	11

奈良県大川遺跡の発掘

酒詰仲男

前々号に記したごとく、奈良県橿原公苑長土井実氏発見にかゝる同県大川遺跡を、予定の如く、奈良県当局と、地元の川添村教育委員会共催の下に、実施する運びになったので、その事業を委嘱された予と、その他関大及同大の一行は、11月9日午前9時を期して、奈良市油坂駅前に集合した。約束通り、県の小島俊次氏も出発に来合わせ、予と諸種の打合わせをした。バスは9時ジャストに出発。奈良市側から中峯山へ行くのは、はじめての経験であった。紅葉の美しい谷々を縫うて、白豪寺村の先から一路大きい坂を登りはじめたと思うと、又下り坂と言った工合で、中峯山へ行く迄に、凡そ五つの峠を越したのには驚ろいた。途中細い崖道が多く、膽を冷やすこと数回。途が崩れて、つい二三日前迄、徒歩連絡をしていた箇所もあったとのことである。ひどくゆれるので、皆前の方へ席を移す。バスは10時50分頃中峯山の例の旅館今出屋の前に安着。こちらの一行と言うのは、関大の石野君、同大の岡田君、匠さん、吉川さん、平野君と予とである。川添村教育長の西久保さんと、小学校長の藤田氏とが迎えに来ていた。まず昼食と言うことになり、その後で皆身仕度を整えて出発する。今出屋から遺跡迄は、約30分位、小一里の道程である。出発の間に、次のバスで、予が私宅に忘れた眼鏡が届くと、村役場から電話があった。不思議だと思ったら、家人が油坂まで届けてくれ、そこから一足遅れて、発掘に参加する網干氏が持参して届けてくれるのだと言うことが解った。

現地へついて、空畑の中央に川の瀬に向って略直角の方向に、長さ10米、巾1.5米のトレンチを設け、南端を除いて8区割をとり、中は深さ20糎ずつ掘ることとする。発掘区のすぐ側に土を積むのは、日本の発掘の悪癖である。今度のように余地のある時に、模範的な発掘をやって見ようと言うことになる。こうすれば各区の境界標も、最后迄維持出来るし、撮影にも至便である。但し、ここに土を置かぬよう、置いてはすぐ二度はねするよう、いつも指揮する必要があった。区割指標も一方に1……8、1'……8'なる番号を附し、1・1'・2・2'区をaトレンチのI区とし、これをaI区で表わし、

その0～20cmの深さをaⅠ-1で現わすことにした。aⅢ-3は3・3'・4・4'区の40～60cmの深さの記号である。各区とも20cm深さごとに、必ず別の袋に遺物を採集した。小中学校の職員4、5名と、生徒10名程が手伝いに来参した。大円ヒ不足のためすこしまごついたが、仕事は順調に進み、夕方までにaⅢ迄大体60～80cm又は80～100cm位の深さまで掘り進めることが出来た。蓋し大体川砂で、非常に掘り易い為でもある。非常に小型の石鏃が発見された。発掘中に見つかる程だから、その数はすくなくないと思われるのであるが、小さいのは石材の欠乏を示唆するものか。サヌカイトなど、この近辺には産出しそうにはないからである。土器は上層には後期の土器が発見されるが、深い程純粹に押型文土器片が出る。4軒位先から手伝いに来ている生徒もあるので、16時には仕事終了。それでも全員が帰宿した時には、日はトツプリと暮れていた。

翌11月10日も快晴。8時に宿舎を出発。9時から仕事に取りかかる。今日も小、中、高校の職員諸氏と、生徒諸君と、昨日と同数位手伝いに来てくれた。農繁期休業で休みである。流感の休校もあるらしい。昨日より大円ヒの数も殖え、進行の速度も解って来たので、今日は上の空き畑に、aと同じ10米の長さのbトレンチを設けることとする。aTⅧとaTrとを、徹底的に深く掘ることとする。基盤を確かめる為である。100cmをすぎると、殆んど遺物が出なくなり、200cm掘っても、白砂ばかりで何の変化もなく、僅かに時々河原石に遭遇する位のものである。岡田君今日から測量をはじめたが、地形から河成段丘と速断していたのは誤りで、多分砂洲らしいということになって来た。吉川さん、匠さんが、遺物の収納掛り、石野君が全体の見まわりと、撮影、平野君が器材がかり、岡田君は測量と全体の指揮。網干君と予とは、今日は14時半に辞去。16時のバスで奈良へ戻る。その頃から空暗くなる。三条の東向のうどん屋でうどんを食って、網干君と訣れる。京都へ着いて直ぐ、匠さん、吉川さんの為に、一粒寮の寮母さんへ、帰りの日が延びた旨電話する。

11月11日。今日は発掘ではなく、午前11時から、NHK京都スタジオで13日7時15分から放送する「出土する土器片から見た古代の京都」の録音に赴く。それに手間取り、漸く13時すぎに解放されたが、雨がひどく、中峯山行は見合わせ。九州の義弟の入洛するのを迎える為でもあった。後で聞いたところによると、今日もテントをaTの上に移し、雨中発掘を行ったそうだ。

11月12日には義弟が7時頃から大阪へ行くと言うので、一緒に動き出したが、雑用処理の為に遅れて8時になったので、8時59分の拓植行の汽車で出発。拓植では2分の待ち合わせで伊賀上野駅へつく。ここまでは順調に来て、10時過ぎにバスで上野市に着いたが、中峯山行のバスは13時迄ない。がっかりする。実は五月橋行にのり、あと10分ほど歩けばよかったのだ。そんなことを知らなかったので、時間を消す為に、街の中を歩く。先ず天神社へ行って見る。慶長以前の出来の大梵鐘がある。社殿は江戸時代のもので新しいが、社務所の方は古いらしい。燈籠にも天保頃のもの2、3あった。あとは日蓮宗の寺ばかりである。仲々の大寺がある。バスが走り出しさえすれば、こちらの側からは僅に40分で中峯山に達する。大した山坂もなく、一回登るだけである。今出屋へねじ込んだら、同じバスから降りた人が、予の後から続いて来て、予の名を詠んでいる。誰かと思ったら拓植の村主種二郎氏であった。向うはこちらを認めて、余程前から声を掛けようかと思っていた由、予は江島修氏の「或る作家の思い出」を読み耽っていた為全く気付かなかったのである。それに学生諸君は別として、予

は全くの初対面であったからでもある。遺跡へ行く途中、読賣のサイドカーに便乗して帰路につく末永氏に会う。その先で土井氏と小島（俊三）氏と、朝日新聞社の記者諸君に会う。土井氏と村主氏は旧知の由。いずれも立ち話で、直ぐ分れる。現場へ着いたら、小島（俊次）氏がただ一人残っていて、予を待っていた。発掘の成績がよいので、皆上気嫌である。1、2の人をのぞいて、監督の先生と生徒が、毎日交替するので、その点鳥渡不便である。また郷土班や、考古クラブ等組織されていないためである。但し大円ヒの数がふえたので、遊んでいるものは殆どない。休んでいるものには、捨て土を吟味して遺物を収容させる。小島君もすぐ帰途につく。aトレンチの下方、川寄りに長さ4米のcトレンチがつくられ、a、b、c各トレンチ全部、ほぼ完掘されていた。寮のことを心配して、吉川さん、匠さん、実は今朝戻って来たところの由。岡田君はトランシット測量略完了したが、各トレンチの層位計測と作図が未だ手がついていない。aT1~2に+1区、aT1'~2'側に-1区を設け、aTと直交するトレンチを掘る。（このトレンチを延長する時には2、3、4区とし、或は1'、2'、3'区と名付ける）この交叉点の-60~80cmに石の集積が発見されて来たが、それが人によって積まれたものであることは明らかであるとしても、その意味は不明であった。また明日一日は仕事がありそうである。夜は平野君のcollectionの話に花が咲く。

11月13日になった。岡田君早朝から、aTの断面図を作る。中、高等学校の職員諸氏と生徒諸君はaT1、-1、+1区の辺の積石を精査。この辺に撮影の焦点も置かれた。全体として捨て土のrediscoveringもよく行われ、小さい石鏃なども、よく採集された。全体に、正確で、綿密な発掘が行われたと言ってよい。aTは耕作による攪乱が浅かったが、bTの方は牛蒡を作っているので、深くまで乱だされていた。ただ上層は後期で、それと間土層を置いて早期の押型紋になっているのは間違いない。押型紋は井桁、穀粒文も僅かにあるが、凹んだ文様のものが多い。これが井桁に続くらしい。高山寺貝塚のような大きな穀粒文はなく、山型が極く少量ある。花輪台式に似た縄文の列点文も1、2片ある。この類の押型文の位置が、今後問題となるであろう。好晴の日には、晩秋の紅葉の対岸を眺めながら、白い川砂の上で昼食をしたのは楽しかった。さんさんと秋の日が照り名張川の碧い流水の彼方に磨崖仏が見える。この日予は日没と共に現場を引き揚げたが、学生諸君は、最後には懐中電灯で測量し、20時近く引き揚げて来た。

11月14日の最後の日には、一同7時に起きたが、荷造りなどに手間どったため、7時半のバス出発まで、仲々せわしかった。西久保、藤田両氏が見送りに来る。帰途は天理行のバスに乗った。この方が道がよい。駅前の佐藤氏に、ここまでバスで運んだ発掘品の発送を依頼し、ここで一応解散した。予はその足で奈良市へ赴き、教育委員会に出頭、仕事終了の挨拶をして帰洛した。

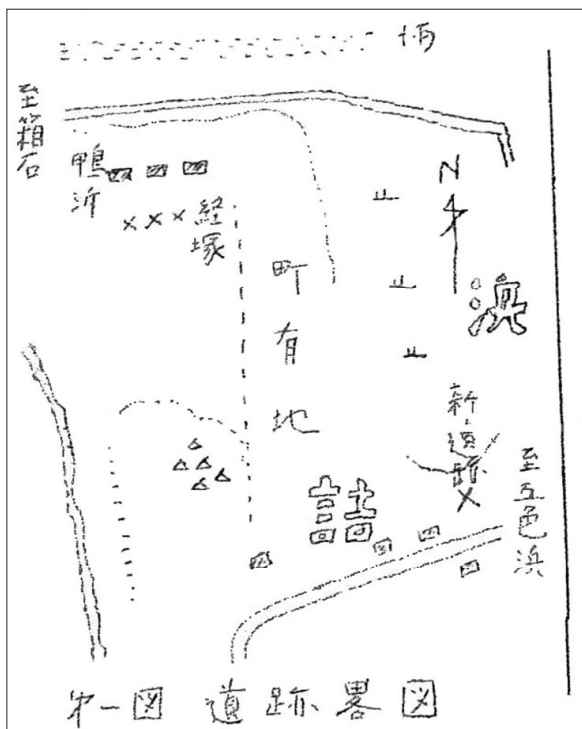
網野紀行

酒詰仲男

11月16日である。5時半起床、6時半に、岡田茂弘君と家を飛び出し、ハイヤーで二条駅へ駆けつける。電話しておいたので、網野駅へ中矢徳治氏が、迎えに出ていた。後から前教育委員長中矢金次

郎氏も来参、大和屋で昼食をよばれる。二、三日、町の会議で、町史編集の話が本決まりとなり、京大人文科学研究所の樋口隆康氏と、予とに顧問を委嘱しようと言った由。そのことを依頼する手紙を出したところだと言う。岡田君は宮下遺跡の発掘報告をまとめるため、もう一度附近の砂丘を精査する必要があると言うので、網野に残る。予は明日の会合の約束をして、14時の列車で一路丹後木津へ赴く。駅前で聞いたら、橘中学は近いと言うので歩いていく。森先生は流感で休み。代わり吉岡先生に会い、学校に集めたと言う遺物を見せて貰う。土器は波線文と、磨消縄文のある後期のものである。多分後期と思われる條痕文土器も混入している。貝塚らしく、サザエ、エゾボラ、サルボウ、カキ、シジミ、ハマグリ、オキアサリなどがある。エゾボラは珍しい。イノシシの跟骨もある。曇って来たが、とに角遺跡を案内して貰う。学校の対岸にある砂丘上の遺跡である。学校から5~600米位のものである。貝塚へ行って見るに、表面に貝殻は殆ど出ていない。夏に芋穴を掘ったところ貝と縄文土器片が出て来たのを、偶々宮下遺跡の発掘を見学に来た生徒の一人が見つけた、この遺跡の発見となったのだと言う。その貝殻の散乱している辺が、その穴であろう。面白いことに、遺跡の中央と思われる辺に、数個の漏斗型の穴があいた、大きな岩盤がある。長年月に繰り返し火力を蒙ったことを示している。当時の仕事場であろう。遺跡の北西方、海岸沿には京都鴨沂高校の海岸宿舎がある。その間に浅い谷があって、そこに経塚が5、6個並んでいたと言う。この舌状の砂丘の東北側半分は町有地となっていてそこに町営住宅を建てるため、本年末頃迄には取り崩す筈と言う。それでその方も見廻ってみる。この方は作物の間に、土師の破片かと思われるものが、僅に散在している程度であった（然しその後この地点の南、谷の奥位のもう一つの新しい縄文遺跡が見つかったと言う報告に接した）。ただ土工事がはじまったら油断がならないので、中学の生徒、或は先生方に、充分見張りをして貰うよう依頼する。鴨沂の宿舎の庭を横切って砂丘を下りると、海岸部沿いで箱石の方へ通じる立派な道がある。吉岡先生にその方へ案内して頂くこととする。箱石の遺跡は、予想外に遠かった。新潟県の砂丘のものから学んだと言う、チューリップの球根を栽培している農園がある。アメリカへ輸出するのだそうである。あとはもとナシの果樹園。この辺がトウチイランの北限で、ハマナスの南限であることを聞く。貝塚にエゾボラの出ていることと意思合わせて、興味があった。

箱石浜の遺跡は、海岸沿いに1200米、奥の方へ約1000米、幾分広い地域が指定史跡になっている。くっついた場所の附近からは、盛んに鉄器が出、奥の砂山に至った方からは人骨がしきりに出ると言う。中央の碑の建っている附近からは、土器が盛んに出るところと言う。写真を取り、土器片も多少採集した。薄い土師の破片である。日本



海の彼方へ沈む赤い夕日が、黒い雲の下からのぞく。久しい以前から一度訪れ度いと思っていた貝塚である。砂へ車輪がはまり込んで、困り果てているオート三輪を押し上げる手伝いなどをした後、もと来た道を学校へ戻る。電話しておいて貰ったので、今夜は木津温泉の蝦長屋泊り、帰途のついでに故を以って、吉岡先生宿迄案内して下さる。駅前迄行ったところ、丁度汽車がついて、岡田君とも一緒になる。最後に吉岡先生の奥様も流感臥床中と聞いて恐縮した。宿は土曜日で、さわがしい団体の客があり、かつボイラーが故障で、ぬるま湯の温泉に入らされた。岡田君の砂丘歩きは仲々成果があった由、この附近は四列でなく、二列の砂丘があるらしい。

夜半に雨たれの音をきく。果して朝起きると雨である。然し岡田君は浜詰遺跡と、各種の石が出る五色浜から、出来れば箱石迄足を延ばすと言うので9時すぎ出発する。その後へ朝日新聞と、続いて産経の記者が来る。いろいろ話した後、遺跡へもう一度一緒に行って呉れと言うことになる。田舎の水たまり道を、オートバイの前かけに乗せられて、フツとばされる。靴と靴下に、容赦なく泥水がはねかえるのには閉口した。学校へ寄って遺物の写真をとり、遺跡もうつし、その後予一人で浜詰の村を歩く。墓場で陸産の貝などを採集した。村の背後の辺では、砂層は案外薄い。すぐ下は粘土の混入した赤色の土層である。大体砂丘の堆積や、移動が、洪積以後のものであろう。それ迄は日本海もなかったかも知れない。

帰宿したら、町史編集委員の方がたは、既に集まって来ていられた。委員長の山下光次郎氏、昨日お会いした中矢金次郎氏等である。皆で7名、やがて岡田君も戻って来る。10時頃から會食をしながら、座談会をすることになる。予は今日迄に得られた網野町の古代遺跡について話す。井上正一氏の持参した瓦で廢寺のあることがわかる。われわれも但馬丹波行を止めて、今夕帰洛することに一決したので、網野へ来る諸君と、16時の汽車の前に、寺址へ行って見ることにする。田川の底から、古瓦と、掘立柱などの残片が出たと言う。現地へ行って見たところ、狭い峡田で、丘を平にして、寺が建てられていたものらしい。余り大きなものではない。然し瓦は蓮辨がつき、塔礎もあつたらしく、その礎心には銅容器が伴っていたと言う。今はそれを二つに割って、忠魂碑の台石にしているのを実見した。おいしいものである。汽車の時間が迫ったので、大いそぎで駅へ戻り、宿から届けられた荷物を受けとって出発。雨がなご車窓を洗う。木津駅と、網野駅で、それぞれの人に訣れ、再来を約して帰洛の途についた。(了)

掲 示 板

11月1日 金曜日。考古学実習の日。堅田君の指導で、相国寺班は今日は墓地の古さの調査。夜和島誠一氏酒詰私宅へ来泊。

11月2日 酒詰は奈良博正倉院展を見に行く。それついでに大仏殿附近を歩いた。大佛の鑄型を捨てたのは、その西側の谷に相違ない。銅滓も地表に出ている。従来大仏の大きさに驚嘆するばかりで、この大仏鑄造の現実、殊にその技術面について考えられていないのは残念である。その辺を掘れば必ず鑄型が出ると思う。あの附近は当時は、鑄造工場の觀を呈したに相異なる。出来上がってから、小屋をつぶして、廻廊や、その他の木造建築物を作ったに違いない。あの辺を一度是非掘って見度

いものである。その西側に当時池があったことが、鑄造場として選定されたこと理由とも見られる。

11月3日 2日夜から種子島の盛園尚孝氏来泊。今日は盛園氏と国分氏とで発掘発見した、例の副葬品である貝製品を拝見する。国分氏はそれについて天理参考館で勉強中とのこと。福原氏の意見では、どうしても太平洋文化圏を考えて見なければと言うことで、南洋から、南米へかけてあの辺の器物の文様について、あらゆる資料と、文献を取り出して調べて見るよし。貝製品中に明かにセミがあり、竜佩文があるので、どうして戦国時代まであげて考えねばならぬと言うことになったらしい。楽浪でもセミを口にふくんだ人骨のあったとか思い出されて興味がある。貝は殆んど全部イモガイの類で、その頭の部分を切って、丁寧にみがき、彫刻したり、切ったりしたものであるが、小さいものには、フトコロガイの加工品もある。十字状のものは沖縄本島樋崎川貝塚から出た京大考古学研究室の資料に一番よく似ている。これで沖縄の文化の諸様相が再び問題となって来るであろう。森貞次郎氏等の意見では、附近から一緒に出土した土器は、北九州で言えば弥生式の中期位のものと言うことになるのだそうだが、これも伴出とまでは言いきれない。他の例を見なければならぬ。従来面縄第一貝塚や甕島の遺構などで、弥生式とあっさり片付けられていたのも、この手の土器なのであろうか。とにかくこの資料は、今年の秋の協会の報告中で、最もsensationalなものであった。

11月4日 盛岡氏、紅村氏、芹沢氏来室、紅村氏には上賀茂本山窯の青磁を見せる。知多半島の愛知用水工事にかゝった窯でも、やはり青磁が出るそうであるか、こんなに美しいのではないと言っていた。今晚後盛岡氏と鈴木氏と、一緒に九州へ向って出発。芹沢氏は酒詰宅に来泊。酒詰は、上賀茂の佐藤芸次郎氏と、茨城県広瀬栄一氏に会う為、木屋町●中旅館へ赴いた。

11月6日 芹沢君来室。照岸洞窟の資料について話す。芹沢君の意見では、例の弥生式は秋田県大湯遺跡から出ている壺形土器の口の破片ではないかと言う。突き瘤も面白いが、東北の附点文と比較して見る必要がある。そうすると、弥生式らしいものと、時代も一致して来るのではないか。古武井遺跡は皆C2か、その同伴関係のものだろうとも語った。今日芹沢氏高山へ赴く。

11月9日～11月14日 別記の如く奈良県川添村大川遺跡を発掘。その留守中に名大へ栄転した岡崎敬氏挨拶の末、樋口隆康氏と中矢徳治氏と、網野の遺物を見に来たよし。

11月13日 午前7時15分から15分間NHK京都放送で、酒詰は「出土した土器片から見た古代の京都」と言う放送をした。朝の「話の手帖」の時間。

11月16日 - 17日 酒詰と岡田茂弘君は網野、丹後木津方面の実査に赴いた。

11月18日 藤井重兵衛氏に紹介された要画伯の案内で、五條坂井野氏の清水焼の窯を見学した。

11月22日 午前9時から藤井重兵衛氏の案内で、深泥ヶ池、幡枝方面の遺跡巡見。

11月27日 ケリー教授帰学歓迎会をアーモスト館でひらく。文化史の先生達のみ会の会。

(以上 酒詰記)

昭和32年12月1日発行
京都市上京区今出川御門
同志社大学先史学会
代表者 岡田茂弘

実習室だより 第9号

1957年12月31日

同志社大学先史学会

【目次】 洛北遺跡処々 酒詰仲男
 発掘調査の組織について 鈴木重治
 卒論紹介
 同志社大学先史学会々則
 新収書目
 掲示板

洛北遺跡処々

酒詰仲男

11月22日上賀茂藤井重兵衛氏の案内で、洛北の遺跡めぐりをした。二条城附近の勸学院趾を角田文衛氏が発掘していると言うので、学生諸君は皆その方へ行ってしまう、定刻9時に深泥ヶ池に集ったのは、案内の藤井氏と予とだけであった。その池の面影は予の学生時代と殆んど変わっていない。ただ富田病院サナトリウムが、池の北半分を占めているのには驚ろいた。奥さんのフサさんは前代議士で、病棟と山林とを併わせて、億万長者と言うことだ。道の西側に分室があつて、そこのテニスコートに竈跡の碑が昔建っていたと言うことだが、例の御菩薩（みぞろ）と言う、仁清頃の窯に関係あるものではなかろうか。探してみたが、全く手がかりは得られなかった。峠を越えるとすぐ岩倉の盆地へ入り、幡枝（はたえだ）の地である。遠くに同志社高校辺の一群の建物が見える。旧家九郎右エ門（古村英一）氏の家を訪ねる。当主の御母堂にお目にかゝり、山で掘った瓦を見せて貰う。栗栖野の瓦窯である。若い奥さんに案内して貰い、窯跡を見に行く。途中城山（じょうやま）と言うのがあるので、寄って見たら、立派な土城址で、濠や、土手がよく遺っている。窯の方も梅原博士達が調査して以来、荒れたまゝになっている（京都府報に報告がある）。鬼瓦の破片などもある。後で向い山の専修寺を訪れ、住職と談する。この寺の下に古寺のあったこと、そこに賢き辺から頂いた弘法の像があり、今はこの寺の有に帰していること。岩清水八幡が遠すぎるので、三宅八幡を勧請し、この附近をその貢分田として幡枝と名付け、その引き出ものにその像を賜わたったのだと言う。叡山を背景に、庭先に柿の赤い実が、花が咲いたように成っている。実に小春日和である。帰途下の寺址を検分したが、瓦の破片すら落ちていなかった。吉村氏へ挨拶に戻ったところ、昼食を供せられたのには恐縮した。当主は同大出身で、大和銀行勤務の由。この奥の幡野にも、御所の瓦を焼く家があつた由。榎（さわらぎ）が左太夫、藤木（紋之丞）が右太夫、藤木（由之介）が桜太夫という位を貰っていたものだ

と言う。当代は皆それぞれ勤め人になって、窯業は止めてしまったと言うことである。ただ幡野の方にはよい粘土がないので、いつも土をここに取りに来たよし。その跡が城山の平坦地の各所に円い穴になって、のこっている由。以上は古村氏の御母堂の談話によるものである。藤井氏の話によると、上賀茂はウシを出し、修学院村に輿（こし）をかつぐと言うように、御所に対するこの辺の村の役割が決まっている。それで何々太夫と言うような位を貰っているのだと言う。帰途上賀茂の山裾を通る。山麓サンヤレ木と言う神木があって、毎年旧の1月の何日かに、元服する若者達（15才）が、皆この木にまいるのだそうだ。その時一つ年下の14才のものが、後からはやしたて、行く。サンヤレ祭りと言うのがこれである。この傍に廃仏毀棄の時に、取りこわされた神宮寺の跡がある。この裾野は中腹に湧水などもあって、正に縄文などの遺跡のありそうなところである。丁度上賀茂ゴルフ場遺跡の裏になる。この麓道に沿うて三つの小さい祠がある。宮は小さいが、それぞれ太田神社の末社で、今宮神社の根本社などもここに含まれているとも言う。上賀茂神社も、太田神社と同じ資格のもの土地の人は考えていると言う。そうした神社を次つぎに巡拝し、要画伯の邸に立ち寄って見たが、留守であった。最後に上賀茂神社の名物焼きもちを買って戻る。栗栖野の瓦の大破片一個を持ち帰ったのを、藤井氏がわざわざ私宅まで自転車で運搬して下さったのは有難かった。（昭32年12・24）

発掘調査の組織について

鈴木重治

最近各地で遺跡の発掘調査が行われ、新聞紙上を賑わしている。一見ブームの波に乗っているようでもある。

戦前の歴史教育の片寄りを是正するために、考古学が果たした役割が大きいことは、誰しも認めるところであるが、その反面“研究の自由”に名を借りて、遺跡が破壊され、遺物が巷に迷っていたことは否定し難い。単なる興味から遺物を集めるだけであるなら、江戸時代のジレタントの態度と変わらぬばかりか、研究、歴史教育にとって、害になっても益にはならない。

この悪弊を法律によって取り除こうとして制定されたのが、「文化財保護法」である。同法の発布によって、乱掘は確かに激減したのであるが、それでも跡を断ったとは言い難い。乱掘以外に遺跡の破壊が行われているが、意識的にやるものの方が、より徹底的であることは事実である。

正当な発掘調査でも、それが充分完全に行われているとは言えない。発掘調査の方法にも問題はあろうが、発掘調査の主体、言い換えれば発掘を行う組織に大きな問題がある。組織に焦点を置いて、今後の指針を求めてみよう。

「文化財保護法」が発布された翌年（昭26）度の発掘調査のうち、考古学協会に報告された124件について見れば第1表の如くである。

(第1表)

組織	研	研共	研高	博	協	文	教	地	計
件数	42	18	36	10	4	1	10	3	124

註 研→大学の研究室 研共→大学等の研究室の共同 研高→大学等の研究室と高等学校の協同 博→博物館
協→考古学協会 文→文化財保護委員会 教→地方の教育委員会 地→地方の研究 者個人

この資料から窺えることは、①大学の研究室が主体となっているものが圧倒的に多いこと。②博物館、教育委の仕事がそれにつづいていること。③考古学協会、文化財保護委員会が中心となっている例は非常にすくないこと。④個人の研究は戦前より戦後にかけて減って来ていることである。この法が個人の乱掘を防止する一つの目的を持っている限り、これは当然と言える。

5年後にこれがどう変化したかを「貝塚」のNews51～62号（昭31・4～32年3月）について見ると、その合計が90であり、内分けは第2表の如くである。

(第2表)

組織	研	研共	研高	博	協	文	教	地	無	計
件数	28	27	13	9	2	3	5	1	2	90

註 無→無届発掘 その他は第1表参照

これによると①大学等の共同調査が非常にのびている。②博物館の活動が全件の10%となり、比重が大きくなっている。③地方の研究者個人の研究が影をひそめているが、まだ無届発掘などによって遺跡が荒らされている。

全体を通じて把握出来ることは、研究室と博物館の活動が目立ち、26年から31年の五年間で、共同研究が非常に殖え、発掘に当って各方面の知識を総合しようと言う意欲が動いているかに見える。それによって個人の調査が減っているのは当然と言える。

発掘調査には多方面の知識が必要で、各分野からの考察が必要であるから、協同は確かに必要である。だがそれが二眼となるのではなく、表裏一体化した眞の意味の協同が必要であることは言う迄もない。

この意味では、考古学協会、或は文化財が中心となって、一層高次の協同発掘を行うことも望ましいことではある。

以上の動きは、一々の場合の経費の出所などから詳細検討して見る必要もあるが、今はこれだけで筆を擱く。

卒論紹介 1

1. 東 宏美 「日本のケールンに就いて」

日本のケールン（積石塚）は、資材の関係から盛土墳の土のかわりに、河原石や、角礫を使用したものと、土俗的な現代にも見られるようなものがある。東君は十月以来及ぶ限りの報告等を渉猟して、数100枚のカードに記入し、その資料によって本論を作りあげた。それによるとケールンの分布

は北は宮城県から、西は長崎県に亘る14県に1000余基ある。普通の古墳と比較すると非常にすくない。然し形貌上は円、楕円、方形、前方後円、双方中円等があって、埴輪を伴うものまである点などと共に、盛土墳と甚だ類似したものとすることが出来る。ただケールン丸石は無造作に積んだものと、石垣積にしたものがあり、後者には大形のものが多い。内部設備については、組合式石棺、竪穴式石棺、横穴式石室、合掌式石室がある。この最後のものは特に長野県特有のもので、大陸殊に朝鮮に起源するものとして、これを重要視して、ケールン大陸伝來說が横行した。然し東君の資料を通観すると、必ずしもそこにのみ重点を置く必要もないと考えられる。多分資材の関係もあり、何故ケールンが作られたかという問題は、なお多面的に見直おす必要がある。

2. 池谷和三 「埴輪考」一特に奈良県と群馬県の比較一

埴輪は古い問題である。然し池谷君は自分は美学或は民族学の対象としてではなく、考古学の対象としての埴輪を論ずるのだと言う。次に埴輪の研究史を述べ、又埴輪が、いかなる理由で樹立されるようになったかを論じている。そして奈良県の宮山古墳例により、壺を土止めにしたのを、その起源としている。その後埴輪並列の仕方を、種類について考え、畿内のものは武具、装飾品類が多く、儀装的であるのに対し、群馬県のもは庶民の生活に即したものが多い点に注目している。池谷君は文献によって材料を集め、図集を作製しただけでなく、東京の諸大学、博物館をめぐり、多くの資料を収集して本論書き上げた。卒論は短期間に書き上げるものなので、本論によって集った材料を悉く利用した訳ではなく、又埴輪の資料は数も多く、次々に発見されるが、仲々 fightのある同君の性格から、今後も引き続き、この仕事を断続して行くことを期待し、同君の健闘を祈って止まない。

3. 北中 叡 「考古学上より見たわが国塔婆の一考察」

これは五重の塔の研究である。北中君は薬師寺の近くに生れ、朝に晩に塔を拝し、自然にそれについて研究して見たくなくなったと言う。塔婆が印度で発生して、中国、朝鮮を経て日本に伝わったと言われるが、その起源は必ずしも明かでなく、日本に来る迄にその姿もいろいろ変っている。わが国で建てられた最古の塔婆は593A.D.の飛鳥寺のものと言われる。その分布は飛鳥を中心に、遠距離に行くほどすくなくなる。時代的には奈良時代に最も多く建てられたが、国分寺の多くが現存しないため今ある多くのものは室町時代のもので、約50基ある。塔は分類して、多重、多層、宝、多塔の各塔と、相輪様に分類される。これ等のうち最も多いのは、勿論多宝塔である。廢塔は約200基あり、奈良時代のもので多く、鎌倉以後は皆無である。所謂「舍利」は、時代が新らしくなる程、心柱礎石内に納めなくなった。その礎石から推定すると、廢塔の高さは凡そ40数米のものから220尺のものまでである。最後に塔は最初寺院の中心を為していたが、後年には単なる装飾となってしまった傾きがある。

同志社先史学会々則

第1章 総会

- 第1条 本会は同志社大学先史学会と称する。
- 第2条 本会は同志社大学関係者を中心として組織し、事務所を同志社大学文学部考古学実習室に置く。
- 第3条 本会は古文化の考古学的研究を目的とする。
- 第4条 本会は以上の目的を達成させるために、下の事業を行う。
- 1 公開講演会
 - 2 研究会
 - 3 研究旅行
 - 4 見学会
 - 5 調査・発掘
 - 6 機関誌の発刊
 - 7 その他本会の目的にかなう事業

第2章 会員

- 第5条 本会は下の会員をもって組織する。
- 1 普通会员
 - 2 会友
 - 3 特別会員
- 第6条 会員は左の各項のいずれかに当るものにして、本会の主旨に賛同し、入会を希望する者をもってする。
- 1 普通会员は同志社の学生よりなる。
 - 2 会友は同志社大学の教職員及卒業生よりなる。
 - 3 特別会員は同志社関係者以外の者よりなる。
- 第7条 会員は本会の行事に参加し、本会所有の設備を使用し、機関紙の配布を受けることが出来る。
- 第8条 会員は所定の会費を納しなければならない。

第3章 役員

- 第9条 本会は下の役員を置く。
- 1 会長……………1名
 - 2 副会長……………1名
 - 3 顧問……………若干名
 - 4 委員……………若干名
- 第10条 会長は同志社大学文学部考古学研究室の主任教授をもってこれに当て、本会を代表するものとする。

第11条 副会長は会長事故ある時に、委員会の推薦によって指名し、会長の職務を代行する。

第12条 顧問は会員中より委員会の推薦により選出する。

第13条 委員は之を普通会员中より選出し、委員会を組織し、本会の中心機関として会務全般を遂行するものとする。

第14条 委員に下の係を設ける。

- 1 会計係
- 2 編輯係
- 3 庶務係（行事担当、図書担当、備品担当）

第15条 本会役員任期は10月1日より1ヶ年とし、事務引継ぎは9月中に行う。

第16条 委員会は毎月1回の定例集会及び必要ある時は臨時委員会を開く。なお会長及副会長は委員会に出席することが出来る。

第4章 総会

第17条 本会は春秋年二回の定時総会と、会長又は委員会が必要と認めた時及び会員の4分の1以上の要求があった時は臨時総会を開くことが出来る。

第5章 会計

第18条 本会運営の資金は会員の会費、会への寄附金及事業益金をもってこれに充てる。

- 1 普通会员……………年額600円
- 2 会友……………ヶ 600円
- 3 特別会員……………ヶ 300円

第19条 会計年度は4月より翌年3月とするが、決算は3月及び9月の二回行うものとする。

第6章 退会

第20条 会員にして退会を希望するものは、委員会の承認を経て退会することが出来る。

第21条 会員にして理由を届ける事なく1年以上会費を滞納したものは委員会の承認を経て除名される。但しその際、委員会に於て釈明することが出来る。

附則

1. 本会々務の細則は、次の総会までは委員会の決定により、定めることとする。
2. 会則による会費は昭和33年度より徴収するものとする。
3. 機関紙の性格、発行回数等は後にこれを定める。

掲 示 板

12月1日（日） 岡田君、平野君は奈良県大川遺跡の後始末並びに山辺郡市社会教育関係教員の実地指導の為山添村に赴いた。

12月2日 岡田君、平野君帰学

12月7日（土） 談話会。坪田嘉子「北海道神恵内洞窟の土器について」、池谷和三「埴輪の話」、岡田茂弘君「考古学の方法（1）発掘の話」

- 12月9日（月） 佐藤芳次郎氏のホンソルビー遺稿出版の件で天理図書館長を訪問ついでに、酒詰は博物館学会等の件で天理参考館に福原氏と訪ねた。
- 12月10日（火） 建仁寺内西来院に於て本年度の先史学会総会を兼ねて忘年会。出席者東、千代、海老沢、平野、細川、堀田、池谷、石部、石附、堅田、小林、宮森、森、岡田、酒詰、嶋瀬、匠、坪田、津田、宇田川、山田、吉川（汨）、の諸兄姉、盛会であった。席上で本誌掲載の先史学会々則を逐條審議。入会の意志を聞くとか、会費未納の者に会誌発送を止めるなど言う点でもめたが、一応規則として可決された。
- 12月13日（金） 酒詰東京へ夜行で出発。
- 12月14日 午前10時から渋谷国学院大学で博物館学講座関係者協議会の発会式、慶應、明治、立教、早稲田、芸大、國學院、文理大及同志社大の者が参集、会則を審議し特に博物館教育実施の現状、資格獲得者の就職の現状及希望について話し合い、又文部省に対して博物館法規改正の要望書などについて話し合った。この会は以後二ヶ月或は三ヶ月ごとに開催されることになった。
- 12月16日（月） 酒詰帰学
- 12月18日（水） 石田一良教授が文化学科から文学部長候補に選出された。
- 12月20日（金） 1月のはじめに大阪梅田阪急百貨店で開催される明治文化展に同志社大学から出展する物についての相談会が、和田文学部長室で開催された。
- 12月21日 天理市「若江の家」で布留遺跡について話し合う会が開られ末永雅雄、佐藤虎雄、小林行雄、福原喜代男、小島俊次、酒詰夫妻等が出席したが、酒詰は文化学科有志のクリスマスパーティー出席のため中座した。
- 12月23日（月） 阪急展覧会出品物の第1回搬出。
- 12月24日（火） 卒論提出日。われわれの方には事故はなかった。
- 12月25日（水） 喜田正明君博物館人文科学学芸員協議会設立の件で天理参考館に福原氏を訪ねた。
- 12月26日（木） 阪急展覧会第2回の出品物運搬、同日陳列も終了
- 12月27日 丹波焼（立杭）の収蔵家安田尚熙氏、杉本捷夫氏来室。伽羅橋の出土品を参観した。
- 12月30日（月） 鈴木重治氏来室即夜東京へ赴いた。

（以上酒詰記）

編集者	岡田茂弘
発行年月	昭和32年12月31日
発行所	京都市上京区烏丸今出川 同志社大学先史学会
代表者	酒詰仲男

実習室だより 第10号

1958年1月21日

同志社大学先史学会

【目次】先史考古学（酒詰仲男）…… 1

卒論紹介…… 3

掲示板…… 7

先史考古学

酒詰仲男

先史考古学の運営に二つの部門がある。一つは発掘と、それに関するすべての部門で、これは自然科学と同列の実験、経験、或は体験の学である。もう一つは遺跡と遺物の解釈に関するもので、論理的思考、類推等がその基礎になる、思想的哲学的な学である。然し前者も結局は記述が必要で、その場合には程度の差こそあれ、やはり記述の学である。それで先史学は一括して哲学的部門の中に入れてられている。

ただ先史発掘はそれだけで一個の完結した仕事で、その事実を記録することは、必然的な要請ではないと言う考え方もある。すくなくとも文字によって記述説明するのではなく、一層客観性を持たせるために写真と図版とを主とし、それに簡単な解説を附するに止めると言うのである。この場合発掘した事実と、出土した遺物が根本的に重要で、それ以外に先史学はないと言う点は一応正しい。

遺物が大地に直結されている場所が遺跡で、それが大地から遊離して発見される場合もあるが、この方は考古学上の資料としての価値は極度に低くなる。今地表が有層的に、序々に堆積して行く場合を考えると、先史遺跡と遺物は大地に埋没しているのが常態とも言える。一般の科学は一定の対象を一定の方法で発掘し、更にその発掘品を処理する一定の手順がある。そしてそれ等の結果を写真又は図版を援用して説明記録する。然しどの場合にも、遺跡の層序的事実が基本である。

遺跡電探法は幼稚で未だ殆んど実用するに足りないが、先史学者は経験の蓄積によって、折んで掘るべき場所を知っている。遺跡は掘るものでなく、トレンチ（試掘壕）によって截るのである。最も大切なことは、埋没の序列を知ること、宝探しをすることではない（結果として出て来た宝を勿論拒否するものではない）。この為に層序に関しては最も慎重にして緻密な地質学上の吟味が要請される。地質学上の完全な知識と方法が採用されねばならないこと勿論である。その上で発掘の進行に伴って現われる諸現象と遺物が、現場で直ちに図表化され、撮影される。発掘者は一いち白紙的態度で、冷厳な態度で直面することが必要である。

発掘品は研究室へ移されて、そこで水洗いし、修覆し、器形と文様とによって分類する等の操作を

受ける。所謂形態学が、その基礎になる。これは動植物の分類と同じである。然しこの際も根本的には、品物の属する層序的事実が基礎となっており、発掘者と同一人が、それを連続操作することが望ましい。そこでその成果のすべてが文章として記述される。それを発掘報告と言うのである。そしてここまでは独断が侵入するとしても長さ、重さ、硬さ、色彩等の物理的乃至化学的様態の框に支えられているので、誤差は先ず小さい。ただ発掘の諸操作よりも、形態学ともなると、多少主観の入り混む率が大きい。

一般の先史学と同様、日本の先史学も文献とは無縁である。大陸の先進国にすら、当時の日本に関する直接の記録はない。ただ、この道の先験者の報告の集積があるのみである。

然し報告と言っても、それは発掘した土層、岩石、動・植物資料、土、石、骨角、貝製品等々特精の記載に止まらず、それ等の材料によって精成される、先験的世界の復元がその目的になっている筈である。この点で先史学は、自然科学と根本的に異なるのである。

もう一つ各資料はヒトの生活に関するものであり、程度の差こそあれ、それ等は悉く文化遺物でそれが相互に作用して作るのが文化の世界であり、その作為者はヒトである。この場合、文化を組織するものは、時間と空間の二つしかなく、しかも空間よりも時間が根本になっているのは勿論である。前者を編年、後者を分布と置き換えても同じである。その両者を通じて、その量と質も問題になる。先史時代のヒトはその個人によるのではなく、人種或は民族という集合体に関して為されるのが特徴である。

時間と空間とヒトと、その文化財と文化が出揃えば、それで少なくとも一つの歴史的記述を試みることは可能であるが、そう考える瞬間にわれわれは、われわれの現在の経験に翻訳している事実を意識せざるを得ないのである。先史学が供与する冷厳な事實は、実は個々のばらばらの事実と、現象でそれを結合する靱帯は、全く消失しているのである。名詞（ナウン）のみを与えられて、動詞（バーブ）がないようなものである。それ故却って、いかなる文章を作成しても、それは作者の自由と言うことにもなる。作文者に加えられる制約がないと言うことにもなる。

上述の靱帯と言う言葉は曖昧である。その実相を究明して見る必要がある。それを時間の流動と言う語に置き換えて見たらどうであろうか。一つの名詞（ナウン）は最も全綜的な合理的にして、然かも宛かも総合的な軸によって整理、統合し、記載する必要がある。その場合、他の総てのものは怪しいとしても、その軸が、動く時間、時間の流れがあったことだけは疑えない。空間も時間の拡張であることは既に述べた。

それでもまず幾つかの事物と事態とを連動性をもった有機体に組織するために、まだ一つの神経が抜けている。それを人類生態学に求めることはどうであろうか。それを貫くのに一つの目的をもって、流れの方向を決定する必要もある。それは文化の起源の穿鑿と雖も、明白なことは遙か過去の事物そのものが大切なのではなく、その現在の生活の諸現象とのつながり、関係が問題だからである。

かくして遺跡と、遺物も、記録として取り出される。そして文字によって記述されたものは、すくなくとも文書として、歴史学の古文書に似たものになる。その意味に於て、それは発掘をその後につづく諸操作に、全く関与しない第三者がその字面のみで読解、利用をしようとしても、それを拒否

することは出来なくなる。ただこの場合、利用者の先史学的体験の有無とか、彼の主観乃至独断の強弱とか、各種の偶然が報告そのものの観点と結合して、推量し切れない多くの錯誤や、誤解を惹起する。

この場合文字が主な媒体となっていることも注意を要する。文字よりも図版の方が、経験をより忠実に表現するか否かも、改めて考慮する必要がある。

ともあれ先史学、根本的に経験の学で、その経験を主観の曇りなく、客観的に捕捉する必要がある。かく慎重に吟味作成された記録は、内容的に最も全綜的な、しかも流動する事実を、ヒトの文化の内容として、その上に有目的的に記述したものであるべきである。第三者のその利用は、最も幸福な場合でも利用者自身の誠意ある別の創作であって、恐らくは原著とは全く縁無き存在となり勝ちである。(昭32.12.7)

卒論紹介 2

4. 嶋瀬晃栄 「滋賀県の古墳」

嶋瀬さんは卒論を書く当初から、滋賀県の考古学的調査の現状に注目し、はじめは同県下の石器時代と古墳時代とを併せて書くつもりだったが、滋賀文化会館の宇野茂樹氏が指導した甲賀郡波濤ヶ平古墳の発掘に参加してから、古墳時代に主力を注ぐことに決心したらしい。そして実によく実際に歩きまわって古墳や古墳の遺物の写真をとった。扱ったのは滋賀県の全郡甲賀郡、野洲郡、神崎郡、蒲生郡、愛知郡、坂田郡、東浅井郡、伊賀郡、高嶋郡、滋賀郡、大津市、栗田郡に及んでいる。最も重要なことは各古墳の遺物等について、宇野氏の記録等を利用したことである。滋賀県の古墳の実数は非常に多いのであるが、ここは特に熱心な研究者も出現せず、全体からみればその成果は余り上がらない実情であった。然し嶋瀬さんの集成によって、ここの前、中、後期の古墳の実相がわかり、しかもその分布表は、大体に於て、本県に於ける古墳分布の濃薄を示している。ただしこし材料負けがした上に、最後のまとめる時になって重い流感にかかり、まとめ方がまずかったが、嶋瀬さんが集めた材料と、作製した地図は実習室で長く役に立つことと思う。附録として波濤ヶ平古墳見学記、文献目録とを挙げている。別冊として五万分の各地域図に、古墳を点示したものと、古墳出土遺物表を添えた。これと同じ系統の仕事は細川富美子氏の京都府の石器時代並びに古墳についての記録と栗津小枝子氏の奈良県内石器時代遺物研究史である。これで滋賀県、京都、奈良県が出来て来た訳である。

5. 横野和夫 「南河内の古墳」

考古学の演習に毎年有能なスポーツマンを迎えることは愉快である。昨年もボクシングの安田裕侯君と野球の枡石淳次君を迎え、本年もアイスホッケーの横野君と、野球の古田昭夫君が来た。横野君はゴールキーパーで、各地へ遠征する忙しい生活の中から何とかこの論文を自分の力でまとめ上げた。大学院の石部正志君の指導をうけて歩きまわり、玉手山、芝山古墳群、駒ヶ谷、飛鳥古墳群、磯長、山田古墳群、羽曳野古墳群、黒姫山、大塚山、金山古墳群を撮影したり、その遺物を参考計測し

たりした。横野君の如き仕事は、ともすると安易な観光案内風のものになり勝ちなのであるが、彼は自ら実査した結果、彼自身のオリジナルなものが出ていて、最上なものではないとしても、堅実性のある論文となった。遠征に行く時には必ずその前後に挨拶に来、努めて時間に出るようにしていた事は非常に立派であったと思う。

6. 古田昭夫君 「硬玉製大珠について」

横野君にくらべて古田君は殆んど時間に出ず、こう言うことは、一生の大問題である旨を同君にも注意しておいた。

掲 示 板

昭和33年（1958）1月1日（水） 晴寒し

本年の年始一番、細川氏夫妻、人骨を持参さる。大いによろこぶ。

1月2日（木）

この日より卒論よみ。読んではノートする。

1月3日（金） 雪つもる時々雪

午前中嶋瀬さん年始に来る。午後東京から戻った鈴木君と中村さん遊びに来る。鈴木さんの兄さんと直子さんの姉さんも近く結婚される由。

1月4日（土） 曇時々晴

鈴木君と五条坂に三浦徹君を訪れ、焼物についていろいろ話をきく。焼物の地方色が次第に露れて行くこと、緑釉は案外火熱が低くてやけること等。鈴木君今晚九州へ帰る。

1月5日（日） 晴寒し

木下大サーカスを見る。久々に宇野君、石部君来宅。この人は鎌倉中学で考古学クラブをはじめた人の一人である。

1月6日（月） 晴

大阪コマ劇場で“愛情十喜”を見る。宇野君来ず 宮森君一人淋しく留守番をしていた。

1月9日（木） 晴

酒話宅で宮森君の送別会。東京から戻った岡田君の歓迎会と兼ねた

1月10日（金） 晴時々曇

宇野君一座の人形芝居「お豆に為ったお狐さん」を見に行く。OTVへ依ってから三好敏夫君に会いお互いに驚く。照明係のアルバイトに来ている由、卒論はそれであきらめたと言う。

1月12日（日） 雨

阪急明治文化展の撤回。岡田君に手伝って貰う。

1月13日（月） 小雨

昨日引き揚げた文化展出品物の収蔵。千代君に手伝って貰う。

1月16日（木） 晴

岡山博物館協議会の件で天理の福原喜代男氏来室。喜多正昭君と3人で会談。

1月18日（土） 晴時々曇

今冬は暖冬異変である。新潟のスキー場では雪乞いをすると言う。毛糸やオーバーが売れず、投売するものしきり。

1月19日（日） 晴時々雪降る

橿原では今日は例年のイノシシを食う会。酒詰は京大の貝類学会へ出席「石器時代のイボニシ」について話す。

1月21日（火） 晴

最後のゼミ。石附君に支払うべき金を元にして、石部、石附、宮森、森、岡田、津田の諸君と夕方朝鮮人のホルモン料理を食いに行く。

1月22日（水） 晴時に雪しぐれ

教授会で石田一良教授が次期の文学部長に決定した。

1月23日（木） 晴

4年英講の最後の時間

1月24日（金） 晴

考古学実習の最後の時間。雑談で終る。

1月25日（土） 曇時に雨ふる

徳富蘇峰誕生の日、千代君行く。先史学会では埋蔵文化財保護の問題について話し合う。

1月26日（日） 晴午后曇後雨

第一次入試、商学部長吉川秀造氏夫人の葬儀、海老沢小枝さんお母さんと来室。

1月27日（月） 晴時々みぞれ

突風で南海丸行方不明となる。

1月28日（火） 晴

今日から入試答案しらべの日。

1月29日（水） 雨

海老沢小枝さん来宅。千代君と岡田君二三日違いで誕生日、合わせて今日やる。石部、宮森、坪田の諸君が^がguests。

1月31日（金） 晴

京都府社会教育課へ「学芸員免許状」を受け取りに行く。

以上（酒詰記）

編集者	岡田茂弘
発行年月日	昭和33年1月21日
発行所	京都市上京区烏丸今出川
	同志社大学先史学会（代表者）酒詰仲男

実習室だより 第11号

1958年2月21日

同志社大学先史学会

文化財保護について

酒詰仲男

以下に記すものは、同志社大学先史学会の談話会で語り合ったことである。私の個人名を出したが、そう言う意味で読んで頂き度い。

1 水野清一氏は最近朝日新聞紙上に、支那でやっている「緊急工作隊」について書いた。全く破壊されようとする遺跡、或いは正に破壊されつつある遺跡については、日本に於いても中共と同じような「緊急工作小組」を作る必要があると言うのである。研究室と適当な研究員のいる各大学では、必ず「緊急工作班」を組織して置くこと。そしてNewsの入り次第、直ちに現場に赴いて調査をする。その経費は各都道府県の教育委員会が負担することを原則とする。然し実際はそれを頼ってはい、時間的にも間に合わないし、金の方もあてには出来ない。それで出来れば各大学で平常から若干の費用をプールしておいて、一度立てかえ払いの形で、支出することにする。この為には或は考古学界全体でその為の資金のカンパをやってもよい。先ず隗より始めよ、同志社大学先史学会でこうした組織を作ることを試みてみてはどうであろう。この班に限って、例の届出制の框も特に考慮して貰う必要もあろう。実際に動くとなったらなおいろいろ研究すべき問題もあろう。然し却って国立大学よりも、同志社のような私立大学の方がやりよい面もあることは事実である。

2 文化財を護る運動は、あらゆる機会を捕えて気長にやる必要がある。その為には、今の小学校、中学校生あたりから、文化財の大切なことを、ポツポツ教えて行くことである。本年の3月、京都府浜詰貝塚を発掘出来たのも、先年夏われわれが網野町宮ノ下遺跡を掘りに行った時に橋中学の人達に、遺跡遺物について語った結果であった。その時縄文土器を見て帰った一人の生徒が、偶々浜詰地内の畑で芋穴をほっているところを通りがかり、そこから土器片が出ているのを先生に告げたことがそのはじまりであった。この貝塚は土工事の為に大半破壊されることになったのであるが幸、その前に遺跡であることが解ったので、町の当局に話をして破壊前にわれわれの手でそれを掘ることが出来たのである。この地方には中矢徳治と言う熱心な好事家が一人おられる丈で、一般の人の考古学に対する関心は極めて低く、皆無と言ってもよい程であった。その中矢氏が先ず宮ノ下遺跡の調査にわれわれを誘い、われわれがその土地で啓蒙運動をやって来た為に小、中、高校生の間に今では考古学に対する関心が大いに高まっている。夕方になると村の子供達が合宿所の附近へ遊びに来て、大いにわれわれと親しみ度い様子を示すことは誰でもよく経験されることと思う。そうした時に無為無策に過ごす

のではなく、何か特別なスライドとプロジェクターくらい用意して行って、手の空いているものが大いに小、中学生に文化財のピーアールをすればよいのである。ただわれわれが昨年北海道へ行った時には、大人用のものしか用意して行かなかったので困った経験がある。ごくやさしい初歩の考古学について語るようなスライドを用意して行くとよい。こう言う仕事を各大学の、地方の調査に行く人達に対して一つのオブリケーションとすればよい。成程古代の遺物と言うテーマがあつて今の生徒達は一度先生からそうした話はきくのであるが、単なる知識として覚えている先生からそんな話をきくと、われわれ体験をもっているものから説明をきくのとでは全く異なる。故に作業に大きな支障の生じない範囲に於いて、是非これを自らやり、又各大学にもやって貰うのがよい。

3 考古学者自身の側にも反省すべき点があるのではなからうか。現在遺跡の発掘は一応届出制であつて、自分等の好きな遺跡を勝手に掘ることが出来る。その選択をする時に、この遺跡は最近こわされそうか、或は相当長い間保存されそうか。そんなことは一向に頓着されない。何でも面白そうな遺跡を、片っぱしから掘りまくるのである。そしてその報告は仲々書かない。殊に練習の為に大事な遺跡を掘って見ると言った試みさえある。こんな場合はどこでも、こわれかけたつまらぬ遺跡を扒すべきである。何よりも破壊されそうな、或は破壊されつつある遺跡がどの方面にも沢山あるのであるから多少研究の方針を枉げても、或は多少つまらぬ遺跡のように思われても、功名心一本にかられることなく、そうした文化財を護る為の発掘も大いに考慮して欲しいものである。

4 ジャーナリズムと考古学の結びつき方にも注意して見る必要がある。新聞が考古学の記事を好んで取り上げてくれることは有難いことだし、今後ともそれは願わしいことである。輿論をつくると言っても、文化財に関する知識を宣伝し、或は啓蒙普及するにしても個人の力ではどうしようもないことである。やはり新聞雑誌、ラジオ、テレビ等の協力を得なければならない。一流の新聞が書き立ててくれれば、その効果は大したものである。ただこの際注意すべきことは考古学を“地底探検記”式の珍奇な学問、グロテスクな学問などと、いまだに考えられていては困るのである。地下から奇妙なもの、或は珍奇なものを掘り出したから新聞にのるとすれば、それは考えて見ねばならぬのである。とかく今の新聞記者諸君は多分にそうした傾向がある。表題や副題をつけるのに、日本或は世界最大とか、最古とか言いたがる。そうでないと取りあわないのである。実はこの頃ともなれば、相当大きく発掘しても、それ程珍しいものや、貴重なものがポカポカ発見される筈はないのである。正直に言えば出て来たものは極めてありふれた平凡なもので、ただその例数を増したに過ぎないようなものが大部分である。それでもそれはその地方の、或はその時代の一つの解明にはなっているのである。つまらぬものしか出ず、平凡なことしかわからなくとも、それを積み上げれば一つの立派な仕事になるのである。こうした事実をジャーナリスト自身も理解し、考古学者も彼等にそれを教えなければならない。そうした時にはじめから、ある一つの仕事に対する計画の解明が大事になって来るのである。それにはある遺跡の発掘に赴く時には、十分に準備をして、今回の発掘はどう言う目的で施行するのか、そして何が出ると予想されるか、それによって何が解かりそうかを文書として用意して行く必要

がある。そして一人のその発掘団のspokesmanから、それが最初から解説的に新聞記者諸君に話される必要がある。これは理解あり、知識ある新聞記者諸君は既に実行していることでもある。そして最後には座談会式のやり方で、そのことに関与した総ての人が、その人の立場から、やった事、発見した事物について語り、それが現在の考古学に何を寄与したかを明らかにするのである。それをジャーナリズムが取り上げるようにしなければならぬ。本来考古学は地味な仕事だと言われる。ところが実際は随分ジャーナリズムに乗ってはでだとも批評される。ハデとか地味とか言う問題は別として、とに角漸進的に文化財の意味が一般の人びとに理解されて行くように、手堅い、しかもたゆみなき仕方でジャーナリズムと結合して行くべきで、珍奇とか、最大最古で結びついては、種子はすぐに尽きてしまうのである。

5 とに角、全体としては中央博物館があつて、すべてその下に研究や発掘が統合されることが一応望ましい。勿論そうなっても細かい点については自由であるべきである。又出て来るものにバリエエティがある限りテーマをそれ程則劃一的に統合することは出来ない。然し何か計画性があるとか、大方針のあることは決してマイナスにはならぬであろう。むしろ現在の如く各大学が勝手に考古学をやり、研究者を養成しているかと思うと、その卒業生の大部分が、その知識を生かして生活して行く方法がないために、全く別の道へ行ってしまう。こんなことを何十年繰り返しても、日本の文化財は完全には護られず、文化財行政は成功しないのである。思い切って考古学者、先史学者を国で全部養成し、国でその活動を助けることをしなければいけない。そうした時にはじめて、この国の文化財は完全に護られ、遺跡の発掘が許可制になる意味も判然として来るのである。 —以上—

掲 示 板

2月1日（土）

今日は海老沢小枝さんの粟津氏へ輿入れの日である。但し本人は御所高校で授業中。

2月2日（日）

田畑ゼミ卒業生の粟津茂一氏と予（ほく）のゼミの海老沢小枝さんの結婚の日。藤井重兵エ氏と予（ほく）の家内とが媒酌。式は京都ホテルで盛大に行われた。

2月4日（火）

第一次入学試験合格者決定の日。

2月8日（土）

夜宇佐晋一氏宅の青考協の会合に出席。はじめて高速道路によって遺跡が破壊される実情を聞く。

2月13日（木）

高速道路について府の対策を聞く。京大に有光教授を訪れ、更に府の長谷川氏の来室を求め、二人で長谷川氏に文句をつける。結局人もなく金もなく、府では頼かむりですごすつもりであった。

2月14日（金）

卒論試問の日。毎年のことながら

2月15日（土）

青考協の会。同大の考古学実習室で

2月16日（日）

同志社博物館研究会で敦煌展を見学。帰途丸太町東洋亭で談話会を開いた。

2月19日（水）

実習室談話会のコンパ。京宝の側の太平楽で。千代、池谷、石部、石附、宮森、岡田、田代、坪田、津田、嶋瀬、匠、吉川の諸兄弟出席。

2月21日（金）

京極寺町の京楽でゼミのコンパ。東、坪田、池谷、北中、嶋瀬、横野君等出席。

2月24日（月）

上賀茂菖蒲園で大学院学生送別会。出席者は秋山、安藤、浅香、石田、Kerry、三品の諸先生と予（ぼく）と、石部、堅田、前田、宮沢、中村、岡田、遠山、宇田川、安井の諸君。このうち送られるのは堅田、前田の二君。

2月25日（火）

関西博物館学芸員協会の件で天理に福原氏を訪問。大阪高嶋屋のA・A展（アジア・アフリカ展）の準備会場で漸く会い話す。

2月26日（水）

岡田君予（ぼく）の家から去ることになり、この日遅く送別茶話会をやる。

2月27日（木）

大学院修士論文試問会。堅田君も前田君もパスと決定した。

2月28日（金）

修士論文の文学部の総合審査会。

（酒詰記）

編 集 者	岡田茂弘
発行年月日	昭33年2月21日
発 行 所	京都市上京区烏丸今出川 同志社大学先史学会（代表者）酒詰仲男

実習室だより 第2巻第1号 第12号

1961年11月1日

同志社大学先史学会

ご挨拶

実習室だよりは昭32年（1957）年4月から昭33（1958）年2月まで続けただけで終わってしまった。それ以来考古学専攻生も増加し、大学院の方にも多くの在学生在がいて、こうして本を続けるよう各方面から要求されるが仲なかその機が熟さなかった。然し今回粟津（海老沢）小枝姉が仕事の一部を引き受けて呉れたので、久し振りで復刊することにした。この印刷物は学問的なむづかしいことは書かないで、文字通り「実習室だより」とし度い。どうか実習室の関係者の告知板として今後愛読して頂きたいし、また卒業生諸氏の最近の消息をどしどし投稿してほしい。

近況

まず先生のことから。石田一良教授は昭和33（1958）年3月で同志社を退職、東北大学へ転任した。昭和34（1959）年菅原憲教授は古稀に達したので勇退した。又三品彰英教授は昭35（1960）年9月大阪市立歴史博物館長に就職するため同志社を辞任した。石田一良教授の代わりに今中寛司教授が就任し、菅原憲教授の代りには永井三明専任講師が就職した。それで現在はそれらの諸先生と秋山教授と安藤教授とOtis Cerry教授と竹田教授と浅香助教授と小川助教授と大下専任講師と酒詰（教授）という陣容である。

これ等のうち、秋山、安藤、今中の三教授と酒詰が大学院を担当している。

竹田教授は脊髄に腫瘍が出来、京大病院に入院9月13日に手術し、その後経過は順調であるが今年一杯ぐらいは出校出来ないらしい。

卒業生は以下の如くである。（敬称略）

1951年

安井良三 [個人住所略] 大学院博士課程に在学、大阪市立歴史博物館に勤務

1956年

大間 元 [個人住所略] 田島順三製作所

粟津（海老沢）小枝 [個人住所略] 2人の母

細川（広部）富美子 [個人住所略] 1人の母

堀田啓一 [個人住所略] 四天王寺高校 昨年結婚した。

藤井謙作 [個人住所略] 味の素大阪本舗

岸 康晴 [個人住所略] 北陽高校 2人の父

喜多正明 [個人住所略] 同志社香里高校 本年春結婚した。
粉川眞治 [個人住所略] 最近結婚した。
宮沢正典 [個人住所略] 同志社女子高校
宮沢（稲垣）博子 同上 淀川女子高校
沢田玩治 [個人住所略]
竹原修吉 [個人住所略] 果樹園経営
宇田川誠一 [個人住所略] 大学院
吉川 博 [個人住所略]
安田裕保 [個人住所略] ガラス器製作 今年結婚した。

1957年

井狩らく子 [個人住所略]
糸谷祐輔 [個人住所略] 大阪印刷インクKK
小林正義 [個人住所略] 大阪中央郵便局外口郵便局
枘石瑞次 不明
大森栄一 [個人住所略]
沢田 一 [個人住所略] 大平住宅株式会社
鈴木重治 [個人住所略] 宮崎県立博物館（学芸員）
鈴木（中村）直子 同上 1人の母
武田荘治 松山市
仲村（山本）明子 [個人住所略] 大学院仲村研君夫人
安井（小坂）彰子 安井良三君夫人

1958年

吉田昭夫 [個人住所略] 日本新葉KK
東 広美 [個人住所略] 奈良県下市大淀中学
池谷和三 [個人住所略] 県立相良高校
加藤三郎 [個人住所略] 市立図書館
北中 叡 [個人住所略] 関西産業KK
福竹（嶋瀬）晃栄 [個人住所略] 1女の母。
槇野和晃 [個人住所略] 福德相互銀行

1959年

平野多加文 大阪市梅田第一生命ビル 静岡新聞（放送）大阪支局
石部（坪田）嘉子 [個人住所略]
池原正紀 [個人住所略] 電波技術者編集部
小塚清勝 [個人住所略] 小塚溶接所
斉藤 剛 [個人住所略] 東京中央郵便局

酒井美樹 [個人住所略] 京阪電鉄KK人事部 (84-8581-5)
匠 咲子 [個人住所略] シューパーマーケット
吉川汨子 [個人住所略]
三好敏夫 [個人住所略]
武田貞信 長野県大町市立病院内

1960年

東 匡尚 [個人住所略] 日本道路公団気付
池田束穂 [個人住所略] 兵庫日産自動車販売KK
西村雅耶 [個人住所略] 日本伸銅KK
上農洋一 [個人住所略] 熊本農協事務室

1961年

石附喜三男 [個人住所略] 大学院
宮森正勝 [個人住所略] 美幌高校
白石太一郎 [個人住所略] 大学院
津田勝彦 東 [個人住所略] エトーネジKK

大学院 (博士課程)

安井良三 前出
石部正志 [個人住所略] 和泉大津高校
堅田 直 [個人住所略] 相愛女子短大
岡田茂弘 [個人住所略] 森方 奈良国立文化財研究所

大学院 (修士課程)

宇田川誠一 前出
石附喜三男 前出
白石太一郎 前出
水野正好 [個人住所略]

大学院 (修士修了)

森 浩一 [個人住所略] 泉大津高校
加藤三郎 前出
喜多正明 (中退) 前出

主な出来ごと (昭和33年)

○昭和32年度卒論

吉田昭夫「硬玉製魚型大珠」
東 宏美「日本のケールンについて」

池谷和三「埴輪考」

福竹晃栄「滋賀県の古墳」

横野和夫「南河内の古墳」

北中 叡「考古学上よりみたる我国塔姿の一考察」

※12月24日（火）正午が締切であった

- 昭33年1月1日 細川計明、富美子夫妻年賀に人骨を持って来てくれた。
- 1月4日 鈴木重治君と三浦徹君を訪問。陶磁器に付いているいろいろ話を聞く。
- 1月5日 今日から一週間大阪阪急で明治文化展があり、教育に関して同志社大学から新島先生の遺品を出品した。
- 1月10日 この頃から酒詰はそろそろ博士論文執筆に着手した。
- 1月22日 石田一良教授の文学部長決定
- 2月2日 栗津茂一氏と海老沢小枝姉の結婚式。田畑忍教授と酒詰とが仲人となる。
- 2月21日 寿楽で卒業生主催のコンパ。
- 2月26日 卒業生判定会議。
- 2月28日 堅田直君修士論文文学教授会パス。
- 3月5日 同上全学審議会パス。
- 3月11日 此頃入試問題漏えいで大さわぎ。
- 3月12日 千代肇君卒業確定。
- 3月13日 大阪で博物館。浜詰遺跡にブルドーザーが動いているという報告。千代君に取不敢現場へ行ってもらおう。
- 3月14日 滋賀県真野のスッポンと瓦器が出ている遺跡があることを知った。この頃石田一良教授東北大へ転任の話はじまる。網野の千代君の要請で急に堅田君、岡田君、田代君等に行って貰うことにする。
- 3月15日 1日遅れで岡田君今日出発。
- 3月18日 石田一良教授転任決定。
- 3月19日 宝塚自然動物園の100万人の子供展の縄文の遺物出品の準備。
- 3月21日 卒業式。式後酒詰宅で水いらずの送別会。池谷、東、北中、福竹（嶋瀬）、俣野、渡辺（信一）、千代、堅田の諸君。今日鈴木重治君の中村直子さんとの話本きまりとなる。
- 3月23日 網野浜詰遺跡発掘に出発。そして3月26日までかかってやっと一応けりをつけて帰る。但し岡田君や千代君はまだ残って住居趾らしいものを掘る。
- 3月27日 仲村研氏、堅田直君大学院博士課程受験。大体合格と決まる。
- 3月29日 両君入学決定。加藤三郎君も修士へ入学決定。
- 3月30日 酒詰の仲介で鈴木重治君と中村直子さん無事結婚。
- 4月1日 網野の住居趾発掘を見に、広瀬栄一氏と出発。岡田、宮森、田代君に会う。今回は4月4日に引き上げる。

- 4月6日 関西博物館学芸員協議会の相談会を天理で開いた。
- 4月7日 嶋瀬さん淡交社へ就職したと報告に来た。
- 4月9日 入学式。
- 4月13日及14日 松本氏（粟津小枝氏郷里）の御招待で吉野の花を見る。これが小枝氏の夫君と御目にかかる最後となる。
- 4月15日 大学院入学式。
- 4月19日 バイパスでやられる遺跡の対策委員会
- 4月25日 関西側を代表してバイパスのこわす遺跡をどうするか、その対策を立てることを東博でひらかれた日本考古学協会総会に緊急動議で出す。これは対策委員会が出来、道路公団が一はだぬぐことになった。4月28日帰洛。
- 4月29日 博国会研究会で大本教々団（亀岡市）を見学。木庭さんの世話になる。この頃酒詰の労組委員長就任漸く決定的となる。
- 5月3日 岡田、津田、宮森、石附の諸君と福井県若狭本郷の対岸大島村の古墳群等を見に行く。郵便局長小泉氏の斡旋による。5月5日帰京。
- 5月8日 宇治自衛隊へバイパスの遺跡発掘応援を依頼に行く。
- 5月11日 大阪美術館で関西博物館学芸員協議会開催。
- 5月13日 演習の写真を撮る。坪田さんだけ休む。
- 5月17日 百万遍進々堂で水野さん、末永さん、小林さん、有光さん達とバイパス対策委員会。この日夕方から翁亭で大学院のコンパ。
- 5月19日 同志社共済組合総会。
- 5月20日 宇治自衛隊幹部と芝町遺跡等を予算。宇佐晋一氏、小川敦夫氏同伴。
- 5月23日 山科遺跡空中撮影の伴で伊丹総監部に行く。
- 5月24日 八尾飛行場へ同じ件で交渉に行く。
- 5月27日 琉球行きの相談開始。
- 5月29日 大八木文化財課長と宇治自衛隊へ発掘延期の了解を得に行く。
- 5月31日 文化財の人と自衛隊の人と現場に行き、どこが掘って良いのか悪いのかをたしかめる。
- 6月4日 午後から芝町弥生式遺跡の発掘準備。岡田、石附、大下、林、松岡の諸君。今日函館遺愛女子学園に勤務した千代君から紹介状をもって生徒4人来る。宮森君に京大資料室などを案内して貰う。
- 6月5日 自衛隊の協力による芝町弥生式遺跡の発掘開始、この日道路公団側を混じえた紫明荘で遺跡調査協議会、梅原、藤田、末永、村田、水野、有光、小林、石田、田沢、坪井（清）、角田及び、酒詰が学者側から出席。
- 6月9日 八尾飛行場へ写真を受け取りに行く。
- 6月10日 芝町の荷物引きあげ。

- 6月16日 朝鮮料理でゼミコンパ。
- 6月17日 勤評の関係で森浩一君止むなく退学。
- 6月20日 白梅町の北野廃寺の発掘（佐原君が主としてやる）一週間以上続いた。
- 6月25日 宇佐氏と宇治自衛隊へ挨拶に行く。
- 6月28日 石田一良教授送別会、滋賀県文化会館田中千年氏に博物館実習の挨拶・先史学会学術団に正式に入ること認められた。
- 7月1日 岡田君大川の逆押型文の話をする。
- 7月9日 夏季手当について委員長として当局と団交。
- 7月10日 バイパス委員会、水野、小林、澄田、末永、有光、景山の諸氏と酒詰、場所は進々堂。
- 7月12日 浜詰に建てる石器時代の住居模型完成。
- 7月14日 今日より博物館実習開始、19日まで。その間16日叡山本坊にとまりに行った。
- 7月19日 堅田君を主任としてバイパスの深草中学地点遺跡を掘ることになる。嘉祥寺の跡がよくわからぬ。何も出ず、最後に仁明陵附近を7月30日から8月11日頃までほり、この方は現代の瓦窯を発見した。
- 8月12日～月14日 福井県大飯町本郷へ。
- 8月22日 岡崎地区研究会発足。京都会館建築のため六勝寺址がこわされる恐れがありその対策を立てようというもの。杉山、三品、川勝、小江、宇佐氏等出席。
- 8月27日及28日 和歌山県水軒浜に酒詰は現世貝類を採集。
- 8月半ば頃から「日本貝塚地名表」の原稿を書きはじめた。
- 9月6日 高速道路の大宅廃寺発掘見学会。京大担当の発掘であった。
- 9月12日～14日 貝塚地名表の仕事で岡山へ行き林に平田文英氏、尾張門田に長瀬董氏を訪問。
- 9月24日 昭和29年にやった出雲古文化研究会の原稿が漸くまとまり、同志社の人文科学研究所へ引き渡す。
- 9月27日 大学院英語共通試験
- 9月28日 岡田君大阪美術館の下郷伝兵エ氏から舞い込んだ縄文土器展の手伝い行く。
- 9月30日 紫明荘で有光、森蒞氏と酒詰と京都府文化財当局と会談。調査費の残額の報告を受け、今後の調査方針を立てる。鳥羽離宮をまず森さんに精密測量して貰うこと、酒詰の責任で西飯食町遺跡の調査をやること、それとあと勸修寺地区のパトロールを行うことなどをきめる。
- 10月1日 博物館実習の延長として大津市制30年展を学芸員の一部が手伝うことになる。
- 10月18日 大阪美術館の縄文土器に因んだ講演会で「日本の貝塚」について話す。森君が25日に弥生式土器の話をする。
- 10月26日より29日まで。能登に出発。考古学協会総会に出席。帰り片山津により遺跡など見て帰る。
- 11月4日 今日から西加茂ゴルフ場の廃寺址と須恵窯の発掘に取りかかる。寺の方は安井君主査、窯の方は堅田君にやって貰う。11月20日まで掘る。
- 11月15日夜19日まで、東京で全国博物館総会に出席。

- 11月25日から30日 同志社EVEの博物館展示をやる。実習の続きである。
- 12月6日 同志社大学琉球調査団出発。団員は堅田君（団長）、宇田川君、加藤美登里さん。酒詰は医者注意で同行を取り止めた。
- 12月8日 工学部覚前氏の世話でナバ、アロ、インディアンについて、E・Horter氏の講演会を開いた。
- 12月13日 同志社学園内に仲々文化史の卒業生が採用されないの、各校長を集めて懇談する。文化史の教授全員出席。
- 12月14日 石附、宮森君琉球へ出発。
- 12月15日 関西学芸員協ギ会を同志社大学で開く。出席者：木庭、佐々木、宇野、佐藤虎雄、小川、佐伯（山口博物館）、三杉（白鶴博物館）、福原の諸氏と酒詰出席。
- 12月18日 「日本貝塚地名表」の原稿を片桐謄写堂へ渡す。
- 12月23日 今中寛司氏の来校略決定した。
- 12月24日 卒論提出日。坪田、三好、斉藤、池原、平野、小塚、酒井、匠、吉川の諸氏である。

実習室だより 第2巻第1号（定価50円）

印刷 昭和36年10月20日

発行 昭和36年11月1日

発行者並びに編集者 酒詰仲男

京都市北区紫野今宮町14

（振替5441 電話44の8603）

発行所 同志社大学先史学実習室

京都市上京区烏丸今出川上ル

実習室だより 第3巻第1号 第13号

1962年9月20日

同志社大学先史学会

ご挨拶

実習室だよりは昭36（1961）年11月1日のものを出してから、もう10ヶ月立ってしまった。申しわけない。先づはじめに卒業生と在学生の有志が集まって私の還暦のパーティーを催して下さった。赤いベレー帽と、ワイシャツと靴下を貰って会場で着せられたのは恥ずかしかったが、家内も同席さして貰って、和やかな一夕をすごすことが出来た。実習室だよりを借りて厚く御礼を述べさして頂く。

近況

今年は4月1日付で、竹田聴洲教授が大学院を担当することになったことと、笠井昌昭君が助手になり、堅田直君が外来講師として、考古学実習を担当することになった。あとの先生方に變動はないが、醍醐へ移って3ヶ月しか経たない秋山国三教授が去る8月30日突然御令閨を失われた。偶々五島出張中の出来ごとでお悔やみ申し上げる機を逃したが、全く驚いた出来ごとである。改めて深く哀悼の意を表する。

OBの動静

1951年度

安井良三 本年2月生まれたばかりの赤ちゃんを失った。

1955年度

大同 元 [個人住所略] 札幌へ転勤になった。

粟津（海老沢）小枝 [個人住所略] の新築家屋へ移った。日曜大工で仕上げたものである。

堀田啓一 結婚して [個人住所略] へ移転。雑誌裏頁には36云々を脱した。済みません。

喜田正明 [個人住所略] へ結婚して新居を構えた。

粉川眞治 [個人住所略] に結婚して新居を構え郵便局を開業した。

沢田玩治 消息不明。

竹原修吉 本年初夏弟君と同時に結婚した。先頃五島調査の折多武君、上農君と共に会った。

吉川 博 [個人住所略] に転住。

1957年度

糸谷祐輔 [個人住所略] へ移転。結婚したのか不明。

小林正義 鳥渡身体を痛めていたが既に元気になった。[個人住所略]
外石端次 さっぱり消息不明。
大森栄一 消息不明。
多武利男 先日五島の帰途ジープで竹原君、上農君を阿蘇へ案内してくれた。
元気である。

武田桂治 鈴木重治君によると結婚したらしい。[個人住所略]。
仲村(山本)明子 すっかり元気になった。

1958年度

東 宏美 [個人住所略]へ戻り御所高校に勤務中。結婚した。
池谷和三 昭和36年夏津田安章君と一緒に行って静岡県相良町の横穴古墳を一つ掘った。目下静岡県教育委員会勤務。住所は[個人住所略]と変わった。
加藤三郎 しじゅう京都へ来る。名古屋で各方面に活躍している。[個人住所略]。

1959年度

平野多加文 ラジオ静岡及静岡新聞の大阪支局に勤務していたが、昨年秋静岡へ戻ることになった。
それ以後消息がない。
石部(坪田)嘉子 夫君のため各方面に活躍中。母となる日も近い様子である。
池原正紀 京都へ戻って大阪の印刷会社へ勤務している。[個人住所略]。
酒井美樹 10月14日に洛陽教会で結婚式を挙げる。

◎なおこのクラスは今春2月4日酒詰宅で卒業後最初のクラス会を開いた。平野、池原、酒井、吉川の諸兄弟が集った。匠さん、石部さんは不参。斉藤君達からは連絡がなかった。

1960年度

倉橋 浩 京都市上京区役所勤務。[個人住所略]。近いのに実習室へは現われない。
若松清吉 三重博物館に勤務することとなった。[個人住所略]。いろいろ御指導を仰ぎ度く宜しくお願いしますと言う。
上農洋一 農協勤務。先日熊本で会見した。次第は前記の如くである。

1961年度

荒木伸一 目下同志社大学博物館研究会のためいろいろとお世話になっている。
津田克彦 江藤ねじをやめて、大同元君の世話で東京の田島製作所KKに就職した。住所はもと通り、考古学出身者を5人位雇い入れたいよし。

1962年度

有元邦男 [個人住所略] 卒論は大原町にある古城について。今は広島市中子町日光証券甲午寮に
いる。
一色治義 [個人住所略] 卒論は高槻附近の弥生式遺跡。これで弥生式の第IV様式の頃に高所に遺跡のあがる傾向がこの辺にもあることがわかった。豪族に奴隷として吸収される前に一度逃亡したのだろう。目下自家営業。

八木久栄 卒論は福井県の船岡師楽式遺跡。目下大学院在学中。[個人住所略]。

1963年度

伊藤久嗣 以下の諸君は目下卒論執筆中の人達である。伊藤君は縄文の古いところをやっている、
[個人住所略]。

前田洋子 [個人住所略] 父君が考古学資料の蒐集家である。

三木倭子 [個人住所略] お兄さんが同志社中学の教諭。卒論は弥生式をやっている。

峰 魏 西洋史の人であるがソヴィエトの旧石器をやると言うので私の方で預っている。彼はど
うしてもソ連へ行き度いと言う。[個人住所略]。

四手井晴子 お父さんが先頃ヒマラヤ登頂に成功された。今西錦司氏の姪でもある。[個人住所略]。
一番古い縄文土器をやると言う。

田代克己 彼は同志社へ正式に入学する一年前から同志社実習室へ毎日通っていた。須恵の論文を
書くと言う。目下平城京の発掘を手伝っている。[個人住所略]。初夏は滋賀県の新東海道路関係
の5つの古墳をやって苦勞した。

津田安章 [個人住所略]。横穴古墳を専門にやると言う。

若城千代 [個人住所略]。お父様が同志社中高の先生である。

◎この人達が来年巣立ち実際に活躍することになれば同志社の考古学に新しい異彩を加えること
になる。

1964年度

◎以下の人は今秋のセミナーに決まったばかりの人である。

今西通晴 [個人住所略]。同志社考古学研究会の役員。発掘歴は多い。

野村泰造 目下同志社考古学研究会会長である。[個人住所略]

塩見 栄 [個人住所略] が郷里。[個人住所略]。仏教をやると言うので心細がっている。

潮 貞雄 [個人住所略]。

◎この人達は大体古墳とか仏教伝来以後の新しいところをやるらしい。

大学院

堅田 直 前記の如く同志社大学外来講師をお願いしたため大学院博士課程を退学した。

岡田茂弘 奈良の国立文化財研究所へ正式に勤務することになったため、大学院を退学した。目下
平城京の発掘に従事している。

木下礼二 甲南大学付属高校、[個人住所略]。朝鮮古代史の専門家でアルピニスト。考古学にも興
味を持っている。博士課程在学。

神原邦男 [個人住所略]。音川方。茶の文化史家。博士課程在学中。郷里は [個人住所略]。

石附喜左男 [個人住所略] の自宅へ帰って微熱で療養中。9月末には帰洛すると言う。擦文土器の
仕事をしあげるであろう。

水野正好 滋賀県教育委員会文化財課に就職したため、修士課程を退学した。奈良市元興寺の発掘
調査に尽くしたが、強い要請で滋賀県へ移ることになった。移る早々銅鐸が10個出現するやら、

新東海道路線にとっかかる遺跡の問題で苦労を重ねていると言う。

白石太一郎 1961年冬に父君を失われたことはショックであったらしい。然し今夏は各方面の発掘を応援して、大活動をした。[個人住所略]。和泉大津高校も手伝っている。

八木久栄 そう言う言葉があればファイトウーマンである。一年中ズボンをはいて暮らす日の方が遙かに多いらしい。目下難波の宮で苦労している。

主な出来ごと

□昭和34年度

この前の号に昭和33年まで記したので、今度は昭和34（1959）年について書くことにする。但しこの年は私が9月末までに博士論文を提出せねばならぬことになったので、細かい日記をつけることを止めた。毎日12時か午前1時になる迄書き、起きるのは毎朝5時であった。時間を限られたせいもあるが身体の弱い私にとって、全く生命掛けの仕事であった。よく続いたものと思う。学位をとるのは、勉強もさることながら、健康が第一だとよく先輩に言われたことを思い出した。20年以上を費やした日本貝塚地名表を副論文とし、日本縄文石器時代食料総説を主論文として、予定通り9月末日に提出することが出来た。主査は三品彰英博士、副査は安藤俊雄教授と文学部長遠藤汪吉教授とに決められた。

この間の真実に主な出来ごとをメモによって拾って見ると以下の如くである。

5月16日 菅原憲博士の退職記念会が行われた。1時半から2時半までユダヤ人の歴史に関する講演があり記念品を贈呈して、4時から5時までアモスト館で祝賀会をやった。

6月26日及27日 京都府久美浜の高校教諭のための講演会に赴きOne swallow does not make Summerと言う話をした。

7月はじめから8月初旬にかけて石部正志君の指導で福井県大飯町大島浜弥の古墳と、師楽式遺跡と、大飯町の古墳の発掘が行われた。私は多忙と衰弱のため参加出来なかった。

8月初旬から北海道神恵内洞窟を千代肇君の指導で掘り学生20名近く渡ったが、心臓衰弱と言われ私は参加出来なかった。

12月6日 仲人として福竹（嶋瀬）晃栄さんの結婚式に立ち会った。

□昭和35年度

地名表印刷の残労と博士論文印刷のため本年も詳細なる記録を迭した。

1月4日 この日から名神高速道路にかかる仁明陵側の茶山の発掘を行った。世話になったのは千代肇君、波多野忠雅君、安井良三君であった。この発掘は3月まで続いた。

3月初め この忙しい仕事の最中に兼ねて依頼されていた滋賀県ケンサイ塚をほることになった。安井良三君が主となって調査した。

3月15日 和歌山県串本町の高校々庭に弥生式低湿地遺跡があり、この時ほらないとコンクリートをはると言われ、止むなく調査した。伊勢田進氏が注目していたもので、船や漁具が出た。目下整

- 理の真最中である。
- 3月31日 正式に博士論文通過発記の通知を受領した。
- 4月25日 森田外総長が東京開成の同級生であるため無理にたのまれて京都外大の外来講師を引き受け、今日その第1回の講義をした。
- 4月末日 日本考古学協会総会で深草以下五つの研究発表を行った。
- 5月はじめ 堅田君等を主として深草の西の方の飯食町と言う土師と須恵の遺跡をやったが 達(マ)が大きいに活動してくれた。ただ成果は余りはかばかしくなかった。
- 5月24日 大学博物館講座協ギ会のため上京、國學院大學であった。ロックフェラー財団とやらの寄附で実に素晴らしい図書館と博物館が出来ていた。そして米国と右翼との結合をつくづく考えさせられた。
- 6月11日 森浩一君のお父さんが逝去された。
- 6月14日から同21日までドック入り。然しねているだけで検査され、本も読めず天井ばかり見つめていると益々わるくなるので、6月25日考古学関係者で予の祝いをしてくれるのに出席すると言う口実でフトンを持って逃げ帰った。肺気腫と、狭心症だそう。
- 6月27日 大徳寺塔頭高桐院の離れに私だけ移転した。鈴木重治君が手伝ってくれた。
- 7月7日 一日中苦しくて遺言状など書く。
- 7月30日 家内を看護婦代りに北海道へ旅行に出発。神恵内へ直行。函館博物館長武内収大氏も参加。8月4日から現場を訪れて札幌、網走、釧路、苫小牧、登別等を経て神恵内へ戻り、8月18日に京都へ帰った。これで神恵内も3年間掘ったのであるがこの洞窟の所在を教示された桐井力蔵氏が12月末逝去され、その時が最後の訪れとなったのは残念であった。
- 8月23日 石部正志君の指導で行われた福井県大飯町大島村浜弥の古墳調査の跡を見るため出発。新しく発見された船岡の師楽式の遺跡などを見て戻った。
- 9月2日 三品彰英教授が大阪歴史博物館館長になるため辞任すると言い出され驚く。
- 9月5日 東京で開かれた文部省主催の国際博物館セミナーへ小川助教授と出席。小川氏が車に乗って来たので、昼休みには市内の各方面へ見学に行った。柳宗悦氏ともこれが最後の分れとなった。最後に三浦半島、伊豆方面の博物館、美術館を見て廻り、強羅の箱根美術館を見たあと、小川君は京ト(マ)へ帰り、私は東京へ戻った。25日まで滞京の筈のところ三品氏の件で2、3日早く帰った。
- 11月 串本の大きな船(2米余)を木箱に入れて持ち帰ったので部屋が狭くて置けず、その結果新町校地の旧南門の側にあった赤レンガの建物を貰うことになった。ところがそれは日本電機の実験室であつたらしく、窓屋根のガラスが破損しており壁ははげており実にひどい建物だった。その上に水道も暖房もなく、串本の遺物の整理をする人達は真実に気の毒であった。折角書いた図の上に雨洩りがしたり、これは同志社大学当局が文化財に与えた罪悪史の1頁である。何回言っても雨洩りはなおらず床の張りかえは行われず実に憤慨で耐えぬところであった。同工館の実習室は箱で身動きがならぬ上、考古学研究会会員7,80名で壮観を通りこして、ごった返す状態であった。然しこ

の方は新島記念学生会館の中に15坪の部屋が貰えることにきまり、来年の3月頃までには部屋を持つことになろう。あと実習室の方は新町校地に引越すことが決定しただけでまだそのままである。然しこの10月で同工館から出されることに決まっているので、赤レンガも昨年末取りこわされてしまったし、目下その臨光館と言う建物の廊下に並べてある。

☆ ☆ ☆ ☆

昨年暮には白石君のお父さん、桐井力蔵、林魁一の諸氏が引き続き他界され、すこし古い藤田亮策先生、後藤守一先生も歿けられた。若い人では事故死をとげた金谷克巳君と、よい仕事をしつづけた矢島清作氏の死が報じられた。

☆ ☆ ☆ ☆

あとがき

何とかしてやっと先史学研究4の発刊に漕ぎつけた。酒詰個人の負担でやっているような仕事である。酒詰は2年続けて文化学会長の仕事をやらされ心理、教育、美学、国文、哲学、文化史の各代表機関に出版物の補助金を割りあてるような仕事もしている。文化史には文化史学があり、これが文化史の代表発表機関である。文化史にはその外笠井君達のやっている文化史研究もある。外の各専攻の代表組織が次第に発展しつつある。先史学研究も号を重ねるごとに益々よいものにして行くつもりである。此頃はアメリカの図書館、各大学等からも先史学研究を送れと言ってくる。

同人を一応きめたが文化史で考古学を専攻し又特に関係のふかかった人は実は全員同人になって頂きたいのである。そうすれば次々に巨弾を発射することが出来る。次号は酒詰の還暦記念号が予定されているようであるが、よろしく願います。そうすれば6号を又直ぐ用意出来ると思う。

実習室だよりのためにも近況をどしどしお寄せ下さい。物人両面からの応援をお願いします。

昭和37（1962）年9月20日発行
発行並びに編集者 酒詰仲男
京都市北区紫野今宮町14
発行所 同志社大学実習室
京都市上京区烏丸今出川上ル同工館内

